1998-21
座談+渡辺慶子　足羽興志子　園田茂人　瀬地山角　ジョン・リー　アジア地域の研究パラダイム　『第１回　静岡アジア・太平洋学術フォーラム記録集』　pp.187-224　静岡県　1997発行

3月28日（金）　学術会議

主題5　アジア地域の研究パラダイム

座　　長：渡辺　慶子（静岡県立大学教授）
討 論 者：橋爪大三郎（東京工業大学教授）
：足羽興志子（一橋大学助教授）
：園田　茂人（中央大学助教授）
：瀬地山　角（東京大学助教授）
：ジョン・リー（イリノイ大学アーバナ・シャンペイン校社会学科長、米国）

March 28 (FRI)　Academic Conference

Theme5　Paradigm of Research on the Asian Region

Chairperson :	KeikoWatanabe	(Professor, University of Shizuoka)
Discussant :	DaisaburoHashizume	(Professor, Tokyo Institute of Technology)
	: Yoshiko Ashiwa	(Associate Professor, Hitotsubashi University)
	: Shigeto Sonoda	(Associate Professor, Chuo University)
	: Kaku Sechiyama	(Associate Professor, The University of Tokyo)
	: John J. Lie	(Head, Department of Sociology, University of Illinois at Urbana-Champaign, U.S.A.)

主題5　Theme5

「アジア地域の研究パラダイム」

Paradigm of Research on the Asian Region

座長：Chairperson
渡 辺 慶 子
Keiko Watanabe
静岡県立大学教授
Professor, University of Shizuoka

渡辺：　この「アジア地域の研究パラダイム」のメンバーに関しましては、前年度に行いましたプレフォーラムのときのメンバーが、かなりそのまま入っています。そのときには、それぞれがアジアをどういう観点からとらえているのかというようなことをしゃべったような気がするんですが、人数も多くて、あまり議論にならない状態で終ったように覚えております。

このフォーラムは、今回が１年目ということで、一応これから10年計画ぐらいでやっていくということですので、とりあえずは５年とか３年とかという、少し長期的な視点で、考えていきたいと思います。我々はどちらかというと社会学的な社会科学系の学者が集まっておりますけれども、一般理論もあれば、地域研究もあるというように、アジア地域に関するいろいろな立場から研究をしております。

そこで、必ずしも共通の枠組みを持つ必要はないんですが、どういうような枠組みで、どういうような研究視点でアジアをとらえているのかということを、もう少しはっきりしていったほうがいいんじゃないかということで、「アジア地域の研究パラダイム」というテーマを、この部会のテーマにいたしました。

ここにいらっしゃる先生方を簡単にご紹介いたします。私の前に座っておられますのが東京工業大学の橋爪先生です。その隣が一橋大学の足羽先生です。その向こうが事務局で、私どもの大学のメンバーなんですが、パネラーの先生はこちら側で、中央大学の園田先生です。その横が東京大学の瀬地山先生です。それから一番向こう側が、イリノイ大学シャンペイン校のジョン・リー先生です。こういう５人のパネラーの先生と、座長を務めます、私静岡県立大学の渡辺でございます。

それでは、討論者によります大体15分から20分程度の基調報告から始めていきたいと思います。先生方、よろしくお願いいたします。それでは最初に、橋爪先生のほうから、よろしくお願いいたします。

橋爪：　橋爪です。15分程度何かしゃべれということなので、日ごろ考えていることを先ほどまとめましたので、それをしゃべります。

全体に３つのことを言いたいと思うんですけれど、まずアジアの現状をどういうふうに理解するかということを簡単にまとめてみたいと思います。次に、特に80年代から90年代にかけてアジアが急速に動いておりますが、そういうアジアの発展状況を、どういうふうに、どういう観点から見ていくかということを考えたいと思います。それから第３番目に、私が緊急の課題として研究すべきであると思っているテーマについて、私のご提案を述べたいと思います。

最初に、アジアという地域をどういうふうに考えるかということですが、私、きのう別のフォーラムに聴衆として参加しておりました。渡辺利夫先生が議長の、アジアの価値について考えていたフォーラムだと思うんですけれども、そこでも繰り返し繰り返し強調されていたことですけれども、「アジアは、ヨーロッパと比べてみると、伝統的な共同体が残存しているという要素が非常に強い」ということ。これが出発点だと思います。別の言葉で言いますと「アジアの多様性」ということでして、地域地域によって、気候や風土が違い、それに密着した共同社会、伝統社会がなお色濃く残存しているということです。

最も典型的なのは、例えばニューギニア高地のようなところでして、ここは山１つ違えば、別な部族、別な言語ということで、１つの地域としてのまとまりというものがありません。同じようなことは、フィリピンのさまざまな島々とか太平洋海域なんかについても言えるわけでして、人類学者にとってはフィールドが大変あって、

いい地域なんですけれど、しかし大変にばらけているわけです。さまざまな伝統社会がたくさんあって移動が少ない。よく見ると共通点はあるかもしれないんですけれども、移動が少ないために、彼らがその共通文化をつくり出しているという点がないわけですね。ヨーロッパの歴史を考えてみますと、地理的な事情によるんですが、民族の移動というのが何回も繰り返して起こりまして、それからキリスト教を初めとする共通文化というものがありまして、それから帝国を建設するという試みもありまして、大変ミックスされているわけです。それに比べますと、アジアは多様であり、素朴であるという出発点があります。

2番目に、ではアジアは全くこういう状態にとどまっているかというと、そうではなくて、幾つかの試みがあったと思います。大きなセンターは2つあって、1つは中国、もう1つはインドだというふうに思います。アジアの範囲をどこまで広げるかによって別なセンターも立てられるかと思いますが。インドについては、ちょっと日本と間接的な関係になりますので省略すると、中国というのは、その伝統社会を飲み込んでいって大きな帝国にまとめ上げるという努力をしたわけでして、非常に大きなセンターになりました。そして中国ではない周辺地域にも文化的な影響を及ぼしているわけで、ベトナム、韓国、日本のようなところは中国の大きな影響を受けております。ということは、もし伝統社会に立脚して、東アジア地域に1つのまとまりをつけようと思うと、中国文化圏というものを抜きにして考えることはできない。これは儒教ベースだとか漢字ベースだとか、いろいろなことが言われていますね。しかし、この中国の統一は非常にアバウトな統一でありまして、伝統的な社会を完全に融合するとか、共通文化を押しつけるという形のものではありませんでした。それは、日本と中国が、これだけ影響を与え合いながらもこんなに違っているということから理解できると思います。

3番目に、このアジアの地域における共通基盤は何かといいますと、ウェスタン・インパクト、ヨーロッパ世界の影響を受けたということだと思います。まずそれは植民地化という形であらわれました。完全に植民地化されてしまった地域、例えばフィリピンとか、ベトナムとか、インドネシアとか、マレーシアとか。こういうところは、そこから世界とのリンクをスタートさせていったわけです。また、日本に植民地化されるという、ちょっと別な形をとった、台湾や朝鮮半島のようなケースもあります。中国はあまりに大きすぎて、全部植民地化されませんでしたけれども、部分的に植民地化されるということで、アジア地域は、共通の経験として、まず植民地化ということを経験いたしました。

次にこの地域で起こった大きな動きは、やはり日本の動きでありまして、欧米の植民地化に抵抗して、別な勢力圏、最終的には大東亜共栄圏というものを、この東アジアの地域に成立させようという大きなムーブメントがありまして、これはアジアの共通性を提起しようとした半世紀ほど前の動きですけれども、このことをよく清算しておくということも必要かなと思います。

その後起こった動きとしては、日本が敗退した後、冷戦が始まってしまいまして、東アジアを政治的に統合する可能性というのが、体制の違いがあるために全く不可能な状況になってしまったわけなんですけれど、80年代の終わりに冷戦が終結すると。80年代の半ばごろから中国が市場経済に向けて動き出すということで、今90年代は、非常にホットな市場経済化の時代になり、東アジア地域全体が、経済的に未曾有の交流を見せているという時期を迎えています。ここで、市場経済という共通要素がこの地域に出てきたと。

このように、多様性の中にもさまざまな共通要素が出ている。しかしそのどれも決め手にならないというのが、アジアの現状かなと思っています。

次に、アジアの発展状況ということで、さらに現状を詳しく見ていきますと、2番目のセクションですけれど、「ポスト冷戦」ということがあるわけです。ポスト冷戦の結果、最大の利益を享受しつつあるように見えるのは中国だと思います。冷戦時代には、日本がもっぱらアメリカの庇護のもと、特権的な位置を占めまして経済的な繁栄を謳歌していたわけなんですけれど、しかし冷戦が終わったときに、今まで享受できなかった自由貿易の利益を受ける立場になったのが、ほかのさまざまなアジア諸国、特に中国ではないかというふうに思います。そして、さまざまな国際分業の新秩序、再組織化というのが進んでいるわけでして、日本では空洞化が進みつつある。別な言葉を使えば、日本からの技術資本がアジア諸国に展開中であると言えます。アジア諸国は急速に成長中であるということがあります。

それではアジアの関係がいかにあるのかということは、いろいろな視点で議論できると思います。日本からこのアジア地域全体を研究する場合の視点というものと、アジア各国の研究者がこの地域を研究する視点というのは、おのずから違っているのではないかと思います。日本の場合から言えば、日本は当然それぞれアジア諸国の各国の固有文化とか、それから民族主義の動向とか、さまざまな組織、慣行、文化、行動様式、心理状態のようなものに興味を持ちます。そのように興味を持つ目的は何かというと、個々の学者はアカデミックな関心で研究をしているんでしょうけれど、その社会的有用性というのは、簡単に言うと、「この国に投資ができるかどうか」ということになるわけです。資本技術を移転する相手先として、この国は適当なのかどうか。カントリー・リスクはどれぐらいあるのか。マネージメントはどうなっているのか。そういう間接的な知識が非常に重要なわけでして、ここ10年、20年の間に、さらに投資を進め、産業を再配置していくのに、その国に対する基本的な情報が必要だ。これが日本国がこういう研究にお金を出す理由であると思います。

ただ、もう少し長い時点で見ますと、その先があって、投資が成功し、新しい経済秩序、国際関係ができていったあかつきに、アジアの多様性が止揚され、統合されて、共通基盤に基づくアジア共同体のようなものが見えてくるんじゃないか。そこには当然さまざまな新しい形の国際協力もできるでしょうし、国際機関も設定されるでしょうし、何かアジアの共通文化のようなものが出てくるかもしれない。これは100年から200年オーダーの、大変長いスパンの話になります。そういうこともやはり我々は見越して、とりあえず「投資に役に立ちますよ」と言って企業をだまし、研究費をもらいながら(笑)、100年スパンの長い研究もしていく。アカデミシャンはこういう作戦でいくのがいいのではないかと思います。

アジア各国からいたしますと、先発のアジア諸国はどういうふうにして近代化を進めたのだろうか。それから追い上げてくる後発のアジア諸国はどういうふうに近代化を進めているのであろうか。こういう隣国の情報を収集するというのが彼らの研究動機ではないかと思います。要するに、それは国内改革のため、経済発展のため、もう少し言えば、安全保障のために隣国の動向について注意せざるを得ない。これがアジア諸国のアジア研究者の主たる研究動機であろうと思います。アジアにとっては、アジア諸国を研究するより、やはり欧米諸国を研究したほうが認識利得が多いですね、近代化のためにとっては。ですからそちらがやはり主流ですけれど、地域的に隣接していたり、競争相手であるという関係から、アジア研究も軽視はできない。こういう位置づけになっていると思います。これもやはり、短期的な視点で研究しているんですけれど、長い目で見て、アジア共同体、アジア共通文化をつくり出すための研究になるのではないかなと。そういう点で協力の余地が大いにあるというふうに思います。

3番目に、日本の緊急の課題として私が考えているのは、第1に北朝鮮問題、第2に台湾問題、それから第3に中国本体の問題というふうになっているんじゃないかと思います。北朝鮮問題というのは、こういうふうにお話をしている間にもあの国はなくなりそうで(笑)、私は大変心配しているわけなんですが、この影響は非常に大きい。韓国にとって影響が大きいのはもちろんですが、さまざまな波及効果を及ぼすと思われます。そのことについて十分研究していないということが日本の特徴でございますので、これは来年一北朝鮮があればいいと思うんですがーここで取り上げるのもいいような1つのテーマかなと思います。

北朝鮮の黄書記という人が、亡命した後フィリピンに移送されたわけですけれども、そのときに、何回も似たような飛行機が飛んだり、航路も発表しないで、中国当局が北朝鮮の不意打ち攻撃に大変に気を遣っていたということが報道されました。これはなぜであろうか。中国の管制技術のほうが進んでおりますから、北朝鮮のミグが飛んできても撃ち落とせると思うんですけれど、しかし私は、これはフェイントといいますか、北朝鮮の万一の暴発を中国が警戒しているということのあらわれであったろうと思います。万一北朝鮮のミグが中国領空に侵入しまして撃ち落とされたりなんていうことがありますと、中国としては北朝鮮に軍隊を進めて戦争をせざるを得ない。ベトナムに侵入していったのと同じロジックでありますね。そういうことのコストを考えるならば、事前にいろいろ網を張っていたほうがいい。こういう検討を中国当局は非常にしているわけですね。北朝鮮が崩壊した場合に、アメリカ主導で併合されてしまいますと、中国にとっては大変に困ったことになるので、なんとかしてイニシアティブを残しつつ、このプロセスをコントロールしたい。それで食料援助とか、さまざまなことも始めております。アメリカも準備しておりますね。あまり準備していないのは日本だけなのではないかというふうに思うのであります。一北朝鮮について長く話してもなんですが。

台湾の問題も同じように、重要であります。ダライラマが最近台湾を訪問いたしましたし、また台湾の核廃棄物を北朝鮮が処理するという、なかなか日本には理解しにくいような動きも起こっております。こういう多角的なリアイリティーというものを私たちは十分見据えていく必要があるんじゃないか。

それから、中国本体の問題は、大変大きな問題で見据えにくいんですけれど、大きな声では申せませんが、現在の政権が20年、10年続いていくのかどうか心配しております。そこでまた当然大きな変動があるわけですが、そういうことを、アカデミシャンであるがゆえに多角的に研究していくと。政治家や財界人が言いにくいことも研究するのが学者の務めであると思いますので、ここでそういうことをやってもいいんじゃないかと、こんなふうなことを考えております。以上です。

渡辺： どうもありがとうございました。

そうしましたら、足羽さん。続けまして発表をお願いいたします。

足羽： 足羽でございます。橋爪先生が非常にクリヤーに、現状等、アカデミズムのポジションまでおまとめくださいましたので、私は文化人類学というものを専攻しておりまして、アジアを見ていく場合に、どうしてもやはり文化の問題というのが非常に気になりますものですから、そちらのほうの側面からお話しさせていただきたいと思います。

まず最初に、文化の見方なんですけれども、いろいろな見方が学問的にもされていますし、経済界や、ほかの学問界の方も文化に対して非常に関心を持たれています。特に最近はそれが顕著ですので、非常に面白い状況にはなってきているんですが、一面では非常に危険な状況でもあると思っております。それは例えばアジア的価値の問題でもそうなんですけれども、それこそご出席のほかの先生方にもお伺いしたいんですが、「果たしてアジア的価値というのは話す価値があるのか」というところですね(笑)。

ちょっと話は、雑談ぽくなるかもしれませんが、昨年の10月ですか、日本のある財団が、アジアの新しい若手の知識人を集めて話をしたいということになりました。

アジアの知識人同士のコミュニケーションというのがほとんどできていない。「それを先導するのが日本ではないか」というような使命感に燃えた財団がございまして、そのときはたまたま東南アジアが中心だったんですが、マレーシア、フィリピン、シンガポール、韓国、インドネシアから、政府の意識コントロールからかなり自由に話せるような知識人を呼びまして－大体30代から40代の方で－いろいろ話をして、２～３カ月間一緒に住んで、討論をし、最終的にパネルディスカッションをして結論を出すという会がございました。その会に私も行っていたんですが、その中でも一番大きなポイントが、Asian valueというものについて語るか語らないかということでした。我々がそれを語ることによってそれを作りあげていってしまうのだったらば知識人はそれについて語らないでおこう。逆に、経済界やほかのところがどんどん作っていってしまうのであれば、それに対するanti-Asian valueというものを語っていかなければいけないんじゃないか。

そこら辺でけんけんがくがくもめていたんですけれども、どういうことかといいますと、価値というものですか。一応アジアをどういうふうに理解するというところに、２つ見方があります。１つは、アジアの人、そこに住んでいる人、そこに生きている人たちがどういうふうに自分たちのことを語るか、どういうふうに自分たちのことを理解しようとしているかというフレームワークを見つけるという見方と、我々日本人の知識人が、どういうふうにアジアを見たいか、アジアを見ようとしているか、整理するかという見方。この２つがあるわけなんですよね。その辺りの齟齬感に対してかなり敏感になっていないと、また、文化というものは作られるものであるというところの認識と両方重ね合わせてみないと、こういったシンポジウム自体が意味のない、あるいは非常に危険なものになってしまうという危機感を私は持っております。

あまり聞いて心地のよい話ではないと思いますし、それがすぐに資本投資にどう結びつくかという問題ではないんですが、ある意味では、欧米も含めた日本が、どういうふうに対象としてのアジアにアプローチしてきたかということに対しての反省作用が非常に必要で、それは「アジアをもっとよく知らなければいけない」とか「アジアについて基本的な知識を集めなければいけない」ということ以前の問題で、どういうふうにとらえるかという問題ですね。アジアがどういうふうに自分たちを考えているかということを私たちは知らなければいけないというところを、文化人類学のほうでは、特に最近非常に意識的に行っております。その点が、まず最初に私のスタンドポイントとしてお話しさせていただきたかったことです。

その上で、それではどういうふうにそれを整理しながらアプローチをしていくかということなんですが、２つあります。１つは、アジアといった場合に、もちろんgeoplitics（地政学）から言えば、日本を中心にした中国、北朝鮮というところですか。それから台湾。これも非常に重要な地域で、これからも非常に研究していかなければいけない手薄なところであると思うんですが、アジアという地域は、橋爪先生が最初に非常に多様なところであるとおっしゃいましたように、いくらでもほかの地域があるわけですよね。インドであるとかチベットの問題であるとか。ウィグルの回教の問題とか。回教として見ていけば、西アジアの問題が浮かんできます。そして西アジアから先に行くと、アフリカの東海岸のほうは、非常にアジアと関係の深い地域です。さらには、オーストラリア、ニュージーランドも含めた非常に広い意味でアジアを見ていく視点というのも１つ必要ではないかと思います。

ついこの間、「環インド洋諸国会議」の第１回目がモーリシャスのほうであったんですけれども、その中に含まれていた国を見ますと、私たちの一般的に持っているアジアの認識というのが、ちょっとひっくり返って、私も国を見ていて面白かったんですが、アフリカの東海岸の国が全部入っています。あと、インド洋に面しているイスラム教圏の国が全部入っておりまして、そしてインド、スリランカ、そしてマレーシア、インドネシア、それからオーストラリアと、非常に広くインド洋を通っております。そこら辺の国が、やはりこれからの経済的なネットワークをつくろうともしていますし、また宗教や文化的にも昔から非常に交流のあった地域なんですね。

また前に戻りますけれども、Asian valueといった場合に、そこに出てくるのは多くの場合、儒教的な価値というものなんですが、アジアの中には回教もありますし、ヒンズー教もありますし、どの宗教とも言えないような土着の価値というものもあるわけですね。それが「村落共同体」とか「伝統的な価値」というふうに言われていいものかどうか、それも１つ問題ですが、非常に多様性というか、地域内でも多様性がありますし、そういったもっと広いところでのアジアというところも、一応多様性として見ていく必要があるんじゃないかと思います。それが見ていく側の視点として１つ。

もう１つは、これはちょっと話すと、私自身が今考えていることで長くなるので、手短に言いますと、例えばアジア的価値とか儒教とか、そういう言葉で説明するのでなければ、あるいはその反対に、GNPとか、いろいろな経済成長を示す言葉で話していくのでなければ、どういった言葉で話していくことができるのか。どういう言葉を使いながら、アジアの中にいる人たちが自分たちを理解しようとしているのかというところで考えますと、非常に物質的なものが一方ではあります。消費主義といっていいのか、産業化と言うべきなのか、どういう言葉で言っていいのかわかりませんが、大きな言葉ではコンシューマーリズム（consumerism）というんですか。１つの消費主義が、共通の現代文化をとらえる言語としてあるんじゃないかと思うんですね。

それはそこでミドルクラスとつながっていく議論になるのかもしれませんが、それと同時に絶対忘れられないのが、去年のこの席上で、ポイントとして上げたと思うんですが、アジア内部での南北問題、アジアの中で出てきています最貧層の人たちの問題です。これは、どこでも語れない。それがすべてNGOの活動とか、NGOのやっている言葉として、翻訳されてしゃべられていいのだろうかというところで、最貧層の問題も含めて、物質的に非常に何も持てないという層が出てきているという問題。

その一方で、consumerismがあるとすると、もう１つのほうでは、やはり価値の問題が出てきているんじゃないか。その価値も、非常に突出した原理主義のような、particular（特異的）な問題を取り上げる人たちと同時に、華僑のネットワーク、あるいは印僑のネットワークに乗りながら、ユニバーサルな（普遍的、一般的な）価値を求めていく。その両方のせめぎ合いが１つある。

その両方の価値の問題と、非常に部質的なconsumerismの問題の間で、何が見れるか。どこのところにフォーカスを置いたらいいかというと、私の場合は、今エージェンシー（agency）というんですか。その両方ともにコミットしながらコントロールしていくエージェンシーに少し注目してみようかなと自分では思っております。例えば、企業であるとか、官僚、教育を行う主体であるとか、宗教団体。あと、価値を生み出すものとして、ネガティブな意味も含めましてNGO。そして、そこで生きている一般の人々に、新聞やいろいろなものを通じながら価値を伝えていくインテレクチャルズ（知識人）。インテレクチャルズというのは、外の世界と内の世界のミディエーター（媒介者）にもなるわけです。そこら辺のところのエージェンシーというか、国家でもなければ、全く声を持たない人々、一般の個人としての人々でもなくて、その中間にありながら、両方の声を代弁しつつ自分たちの声も出していくようなエージェンシーをどれだけその国が持っているのかというところを問題として見ていくと面白いのではないかなと思っております。以上です。

渡辺：　ありがとうございました。

続きまして、園田先生のほうから、これはプレゼンテーションの資料がありますので、皆さん端末の中で「プレゼンテーション資料」というところをクリックしてもらって、その画面を出してごらんください。前面には同じものを出します。

園田：　おはようございます。中央大学の園田と申します。

私の前にはもう既に話の筋、橋爪先生と足羽先生がつくられたコンテキストがありますので、ちょっとそれに話を引きつけながら話をしたいと思います。

きのう、ちょっと寝つけなくて、ずっと日本のワールドカップ１次予選を見ておりました。ご存知のように、2002年にはワールドカップの日韓共同開催が行われます。これは日本でもそうだし韓国でもそうでありますが、非常にびっくりしたニュースでした。このことと、先ほどの橋爪先生の話に大変絡む話を、もう１つ前置きの話としてご紹介したいと思います。

実は今、「現代中国の構造変動」という重点領域研究が文部省の研究であるんですが、それの絡みで、去年の11月の終わりにコペンハーゲンで開かれました「東アジアにおける国家と社会ネットワーク」というシンポジウムに参加する機会がございました。そのシンポジウムはコペンハーゲン大学が中心になってやられたんですが、そこを財政的に支援したのが台湾の財団でした。たまたまでございますが、コペンハーゲンに在駐しておられる台湾の官僚の方からお招きを受けまして、台湾の国際関係をやっておられる先生と２人で招待されて行ったんでございますが、デンマークの野党の副党首という方もなぜか来まして、そこで話になったんですが、すごく面白い話なんです。

何だったかといいますと、その副党首の方が最初に何を言うかというと、「俺は台湾びいきなんだ」と。まあ、これは台湾の方に呼ばれていたので当然そう言うかなと思って聞いていたんですが、次に、台湾の方に、「おまえら、なぜ大陸とけんかをしておるのだ。早く仲直りしろ。仲直りできるだろう？おまえたち」というような話をしだしたんです。国際政治をなさっている台湾の先生がそれを聞いて大変びっくりしまして、「こいつは何を言っているんだ。おまえ、なんと無知なことを言っている。こんなに体制も違うし。おまえ知っているだろう、台湾海峡の演習の問題を。あるいは台湾独立の問題とか、いろいろあるんだ」と。そうしましたら、副党首が、「そんなのはわかってるよ。ドイツの統合の前にも、みんなそういうことを言っとった。しかし、知らないうちに我々はドイツの統合というのを見たんだ。おまえたち、けんかしている、けんかしていると言うけれど、実際同じじゃないか」と言うわけですね。

当事者にとってみれば、全然違うし、台湾の人たちからすると、国際政治上で中国との関係をどういうふうにして作っていくかというのは、極めて深刻な、そして非常に大きなある種の認識ギャップやさまざまなギャップを抱えている。にもかかわらず、そうした意識を飛び越えて、「おまえたちは同じなんだ」と言う。その時、私は「ああ、なるほど。そう見えちゃうのかな」と思いました。変な言い方をしますと、そういう視点のつくり方によって、我々が同じにように見えたり、あるいは違って見えたりもするのだなと思いました。

それでだんだん話の内容に入ってきますが、アジアということを語るときにも、結局、だれの立場で、何をどんなふうに語っていくかによって全然イメージが違ってしまう。権力のつくられ方とか、家族、親族の構成のされ方とか、村落共同体のつくられ方とか、いろいろな補助線を引いて、その視点から語っていくことはできます。また、先ほどの橋爪先生の話にあったような、ある種の近代化、あるいは足羽先生がおっしゃられたconsumerism。こういうものでアジアをくくっていくというのも、それは多分アジアを語る際の大変重要な視点になるんでしょうが、問題は、それがどれだけの有効性を持つのかというのと同時に、それによって何を指し示すのかとい

うのは、やはり非常に意識すべきことだと思います。今申し上げたように、デンマークの方から見ると中国も台湾も同じわけです。きのうの経済のセッションでも、中西先生が「東南アジアから見た東アジア」という中で、東アジアはみな同じで、「日本も韓国、朝鮮、中国も、村落自治というのが大変発達している」ということをおっしゃっていたわけですが、私など「本当かな」と思ってしまいます。「日本と中国って、そんなに同じ？」なんて思ってしまうわけです。このように、どういう補助線を引いていくかということが、実は私たちにとってこれからも大変に重要でしょうし、今も少なくとも大変重要な問題になっているだろうという気がします。

ただいまの橋爪先生、足羽先生の話の中にも、ウェスタン・インパクト、あるいはコンシューマーリズムなど、ある種の西洋的な価値という問題が入ってきた。これは、我々が研究者の立場としてアジアを語る際に、どうしても避けられない問題として、一方でのローカリゼーション、土着化概念、あるいは研究の視点としての土着化という視点があろうと思います。これは、一番卑近な例で申し上げますと、日本人論なんていうのはまさにそういうようなところでございまして、要するに「欧米とは違う日本的な価値があるんだ」と。あるいは「日本的行動様式というものをどういうふうに概念化したらいいだろうか」と。あるいは、そもそも甘えですとか、そういう日本的な言語を用いながら、西洋の学問とは違う、あるいはそれに対してのアンチテーゼというわけではありませんが、新しい方向性を持ってくるという議論になります。

これは、先ほどの橋爪先生の、アジア以外の地域においては、安全保障、特に自国にとっての安全保障のための研究が大変重要だろうという部分と大変に絡んでいるのでありますが、このローカリゼーションということは社会学のみならず、心理学等々でも最近相当広く用いられるようになっています。ここ10年間ぐらいの非常に大きな傾向だろうと思います。それは、まさにコンシューマーリズムのレベルで申し上げると、「○○人論」というのは売れるということです。書く人も多い。読む人も増えている。例えば、最近日本でも大変はやりましたが、「ノーと言える中国」というのがございます。あれは、中国人論というにはちょっと粗雑な感じもしなくはないんですが、あれはある種の中国人論みたいな議論でしょうし、それの全く違う形態としては「みにくい中国人」なんていう議論もありまして、「欧米人、日本人と比べると、中国人がいかにできないか」みたいな話を内部告発するような形で研究している。

これは、言ってみれば、まさにウエスタン・インパクトへのある種のリアクションといいますか、自分たちを自分たちの目でどういうふうにとらえるかという方向戦略です。それは部分的には、我々の研究の中でも、ディシプリン(discipline) の立場、つまり、ある特定の見方、変数の構成の仕方、あるいはデータの取り方など、こういうものに対して、ある一定の規則性を持った学問の立場からは表面的なオブザーベーションしかできないという認識があります。したがって、個々の地域の持つにおいとでもいうようなものをすくい上げたような研究というのはどうしても必要だというので、地域研究ということが、これはもう1950年代、1960年代から言われているんですが、ここ最近の大学の改変等々の中でもしばしば言われていることであります。

多分、今のレベルは、この「地域研究が大変重要だ」というような話のレベルだと思うんですが、先ほど橋爪先生のおっしゃった、その次のステップというのが、やはり僕は研究戦略上どうしても必要になってくるだろうというふうに思います。それは例えばどんなことかと申しますと、実は私の研究パートナーが、猪口先生の別の部会にいるんですが、先ほど足羽先生からもちょっとご指摘があった中間層の研究を、東アジアの中で比較研究してみようとしています。隣にいる瀬地山さんも、実はその中に巻き込んでしまっているのでありますが。そこで大きな問題になるのは何かというと、個々の、特に西洋を中心にしてでき上がった、例えばclass(階級)、stratification(階層)、あるいは分層。そういうような概念を、それぞれどういうような形で個々の現状に当てはめていくか。これは、当然それぞれの地域のにおいを出すために、それぞれさまざまな形でモディファイ(modify)していきます。モードを変えていきます。そして、それらを理解するための概念というのを、それぞれ独自にやっていくのでありますが、そうしていきますと、今度はある国で出てきたあるイメージと、ある国ででき上がった別のイメージを、どうしてすり合わせていくかという問題が出てまいります。

つまりそれは、一方で、自分たちを認識するために、西洋なり、あるいはときには日本なんかも利用されることがあるんですが、そういう合わせ鏡のような形で、相手の社会を見ながら自分の社会を語っていくというプロセスでは、一方で土着化という、今申し上げたような傾向が出てくるんですが、これをどうすり合わせていくかという大変大きな問題がありまして、これは言葉で言うのは大変簡単なんですが、実際ある種のuniversalizationでやろうとすると、土着化の以前、あるいは土着化をすることを決意した元のところに、下手をすると戻ってしまう。要するに、「西洋のあるモデルを当てはめたら、この地域に当てはまる、当てはまらない」という議論にどうしてもなってしまう。したがって、概念ですとかデータをどういうふうに互換していくかというのは大変重要だろうというふうに思います。

最後に、少なくとも私は何をしているか、あるいはどんなことを考えているかというのが、この「ゲリラ式比較研究の重要性」ということでございます。先ほど申し上げたように、例えばデンマークの野党の副党首から見ると、台湾と中国が全く同じように見える。あるいは逆に、私は、実は中国だけではなくて、スロバキア、特に中部スロバキアの地域調査なんかもやっていたりしますと、部分的に中国の現象が、アジアというコンテキストの中で理解すべき、あるいは理解されることと、社会主義の伝統を持っていたということによって説明できる部分とがある。それが非常に混在しているんだろうと思います。

西欧あるいは西洋と東洋という軸の中で中国の社会が語られる場合、中国の社会では、ある種の自由が欠如しているというような話になる。あるいは先ほどの村落自治云々の話でいうと、一番よく言われる議論というのは、西洋、特に西欧の中では、村落自治というのが非常に発達していて、中国ではこれが発達していないという話なんでございますが、実際に90年代以降のpost-socialismの中で起こっている現象を、当然中国も大変地域が広いので、どこを選ぶかによっても結論は全然違ってくるんですが、私が見ている範囲の中での村落の変化と中部スロバキアの変化を見ていると、単純に西洋が自由主義、あるいは村落自治としての歴史を持っていたということによっては説明できない。中国のほうが極めて自由度を高く持っているというようなことが結論的に出てくるようなこともある。とすると、結局私たちのでき上がったイメージというのが、当然ある種のreferenceというんですか、ある基軸をもとに議論されなければならないことは確かなんですが、しかしそれにこだわりすぎていると、もしかすると我々は下手なイメージを作ってしまうかもしれないということであります。そして、それをどういうふうに説明していくかというのが、実に先ほどの概念の互換性を考えるという点と重なってくるんですが、現在私が直面している幾つかのケースを皆さんにご紹介しながら、いかに比較をしていくことが重要であるかということと同時に、いかにある種の、みんなが当たり前だと思っている、つまりアジア的だとか、東アジア的だとか、儒教的だとか、そう言ってしまうと我々が何となくすっきりしてしまうことが、実はあまりすっきりしない現実があるんだということを、私の今やっているサーベイの中から、この図を見ていただきながら考えてみたいと思います。

まず図1でございます。これはどんな調査かと申しますと、去年行った調査なんでございますが、日系企業で、東アジア地域－韓国からインドネシアーに進出した企業を対象に実施したものです。回答を寄せてくださったのが、37社でございまして、各国平均しますと5社から6社になります。サンプル数で申し上げますと35人程度ですから、人数的には大したことないんです。これは、全員ほぼ同じ企業規模のマネージャークラスの人たちに質問したものであります。ですから、国の代表性という問題は当然出てくるんですが、しかし階層性ですとか企業の属性などは相当コントロールされていますから、そういう意味でいうとある種の比較は可能だろうと思うんです。

この図1は何を指し示しているかと申し上げますと、実際その企業の中で、管理職への昇進の条件として、学歴が重視されているとする評価と、周囲はそういう管理職への昇進の際に、どの程度学歴というものを期待しているかということであります。この値は「理想と現実」と書いてありますが、上に行けば行くほど、周囲の期待、つまりプロモーションするのに当たって学歴を重視してほしいという周囲の声が大きいことを示します。

これを見てみますと、私たちはしばしば、儒教文化圏ということを言うときに、「学歴重視」なんていう話をするわけですが、実際に中国の値を見てみますと、実際に学歴がどの程度重視されているかという現実のレベルで言いますと、中国は大変に高い。この7つの国の中では一番高い値を示しているんですが、では周囲の理想と現実の間にどの程度のギャップがあるかといいますと、非常にラフに申し上げると、韓国はもうイコールです。韓国、中国、台湾。このあたりは、一番大きな台湾でも0.1ポイントを上回らない。ところが東南アジア、特にマレーシアの値では、この値が非常に大きい。このデータは、我々が、例えば儒教文化圏が学歴を重視しているという、ある主の常識によって、どの程度説明されるかというと、よく分からないわけでありますね。

少し話を続けてみますが、図の2でございます。図の2は、管理職への昇進の際に、人格をどの程度重視してほしいと周囲の人が思っているかを示しています。これもサンプルの問題等があって一般化するのは難しいので

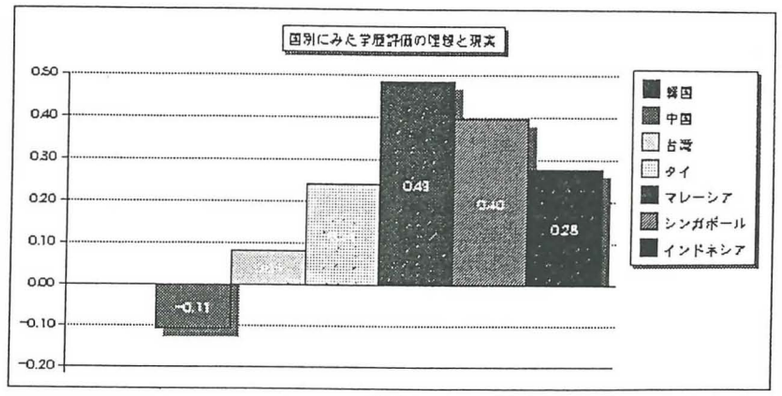

図1

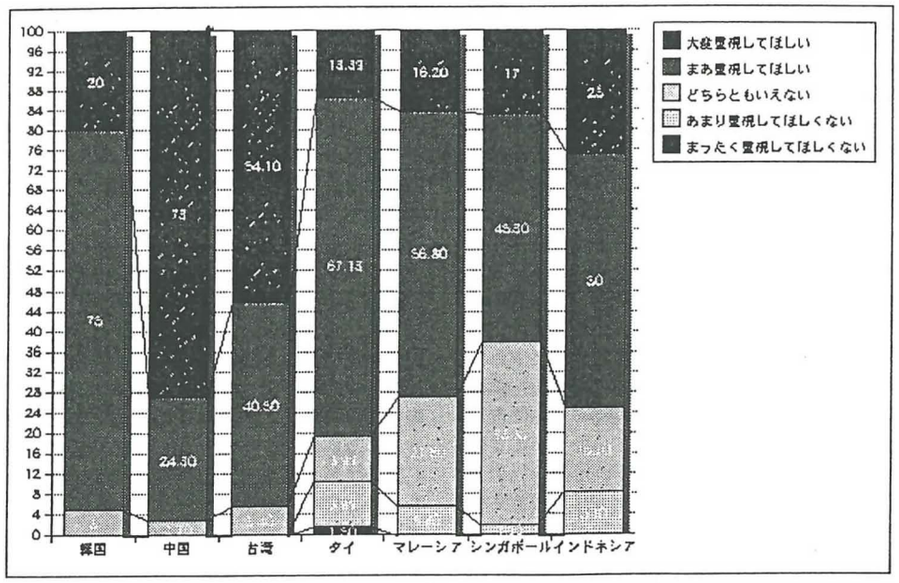

図2

すが、例えば中国、台湾というのは、人格を重視してほしいとする傾向が強い。ところが、東南アジアの世界になると、総体的に、「人格という要素をプロモーションの条件として考えないでほしい」というような意見も比較的強く出てくる。こういうデータを見ると、やはり東南アジアと東アジアというのは違うのかなという気もしてくるわけです。

もう時間がないので急いでいきますと、最後は図の3でございます。これは先ほどの図の1と同じでございまして、周囲の期待値と現実の間のギャップです。ですから、上に行けば行くほど周囲は期待しているということであります。これは多分瀬地山さんが非常に得意な話なんですが、例えば同じ東アジア、先ほど人格重視というような話がありましたし、実際とは違いますけれど学歴重視ということが言われる。こういう、ある種の儒教文化圏というのはあるんじゃないかというのはよく議論されるんですが、それでは勤続年数というのはどうか。つまり、ある一定の年限この会社で勤めたから、それがプロモーションの大変重要な要素になるかどうか。これに関して言うと、中国はマイナス値を示しております。同時に、実際にこの勤続年数がどの程度重要な意味を示しているかというのも、これは7カ国の中で、もし台湾を国と申し上げると、7カ国の中で中国、台湾というのは大変低い値。同時に韓国は大変高い値を示している。

これは、同じ儒教文化圏の、ある種の長幼の序とかというような議論の中では絶対説明ができない部分といいますか、同じように東南アジアの中でも、インドネシアがこんな大きな価を示している。これは何なのかということであります。何なのかと言われても、実は私もよくわからない。やってみると、実はわからないことがたくさんあるということがわかってしまうという、話していながら、何かまどろっこしい、「それじゃ、なんでおまえ、そんなことをやったんだ」という話になるのでありますが、こういう結果が出ているわけであります。

最後に話のまとめでございますが、どこに注目し、どういう補助線を引きながら、どういうデータをもってアジアを語っていくかということによって、ある神話がつくられたり、ある神話が崩されたり、あるいは新しいイメージができたりと、多分さまざまな概念をめぐるそうしたコンペティション（競合）というのが、多分現実に起こっているでしょうし、これから我々は、もう少し着実なレベルで、さまざまな、今申し上げたような機動力を持ちながらアジアを語っていくということをやっていいのではないかと。最後に「研究の宝庫としてのアジア」なんていうことも書きましたが、我々の前には、実は語り切れていないアジアがあるんだという感じがするわけであります。

渡辺： どうもありがとうございました。それでは瀬地山先生、続けてお願いいたします。

瀬地山： ご紹介に預かりました東京大学の瀬地山と申します。もういろんな偉い先生が大概のことを話してくださったので、私はあまり言うことが残っていないんですが、何もしゃべらずに帰るわけにもいかないので、何か少しだけお話をしようと思います。

私は何をやっているかというと、東アジアのことをやっていまして、基本的には朝鮮半島と中国と台湾というのを比較をするというのが、やっている仕事のひとつであります。その仕事との関係で、アジア研究というのがどういうものなのかということを、少しお話をさせていただこうと思います。

先ほどから何度も、金太郎あめのように出てきているお話ですけれども、「アジアというのは何なのか」というお話ですね。私の勤務先にもアジア科という地域研究の学科がありまして、私もときどきそこの会議に出なければいけないんですが、去年も申し上げたようなことですけれど、いつでもそこでは議論になっていて、「一体アジア科というのにどれだけのまとまりがあるのか」という話になるわけですね。やっぱり東アジアと東南アジアと南アジアと、さらに私どもの場合には、スタッフで西アジアも含まれておりますので、そんな人が集まってきても大体共通の話題なんてほとんど出てこないんですね。そんな中で、果たしてアジア研究というのは、どういう形で意味があるのだろうかということとは、いつも向き合わざるを得ないのですが、そのことと絡めながら、東アジアの話を含めてちょっとお話をしようと思います。

私自身は、東アジアの中で、特に今までにやってきた仕事では、ジェンダー、性別というものに基づいて、それぞれの社会がどういうふうに編成をされているかということに、ずっと興味を持って研究をしてきました。東アジアということで申し上げると、これは先ほど来何度も出てきているように、相当な共通の基盤を持った社会であると言えると思います。今、私がやっているような作業で、どういうポイントがあるかというと、例えば父系血縁というのを非常に強く共有しているわけですね。父方のラインに沿ってずっと姓が伝達されるということです。姓が伝達されるということも、実は我々にとっては比較的自明のことですけれども、例えば欧米に行くなり、もしくは東南アジアに行ってみれば、かなり不思議なことなわけですね。父系に沿って、姓という形で継承されていくというのは相当不思議な現象であります。

こういうことによってどういう共通点が生まれてくるかというと、こんなことは別に私が言わなくても皆さんご存じだと思いますが、世代に基づいて秩序化が起きるということです。「年とっている人はやっぱり偉いんだ」とかいうような感覚とかいうのは、親と同居をするような文化の中で比較的育まれやすいわけですね。成人後も比較的親と同居することが一般的である社会であります、この東アジアというのは。そういう社会では敬老思想というのが非常に生まれやすい。

それから、父系血縁で血がずっとつながっていくことが家族の象徴であるという社会になりますから、こういう社会は、家族原理の中で血統主義というのが非常に大きな意味を占めていて、大体国籍条項というのは、その国の家族原理の延長が採用されることが非常に多くて、父系血縁が非常にラインとしてしっかりしている社会というのは、ほとんど国籍条項は出生地主義ではなくて血統主義になります。例えばヨーロッパの場合でも、ドイツは血統主義ですが、フランスは出生地主義なんですね。アメリカのような出生地主義をとらないで、東アジアというのは、非常に強い血統主義を、国籍条項でいずれも採用している国が併存していると。

余談ですが、在日韓国人の問題、在日韓国朝鮮人の問題というのが日本でどうしてこういう形になるか。もう50年も経っているわけですから、アメリカで考えてみたら、「Korean-Japanese」というような表現ーアメリカだったら、「Korean-American」あるいは「Japanese-American」というふうに言うわけですからーが生まれてきても不思議はないわけです。ですけれど、日本ではいまだに「在日韓国人」と言っている。つまり「韓国系日本人」ではなくて「在日韓国人」という言い方になる。これはどうしてかというと、お互いが血統主義で、お互いが交じり合わない文化を持っていて、お互いが交じり合わないものだから、ずっとそのまま残ってしまうというような特徴を持っているわけです。これは全くの余談ですが。

他にも、学歴志向であるとか、階級的に均一であるとか。こういうことが幾つか共通点として言えて、やっぱり「近いアジア」なのだろうと思います。恐らく日本人にとって、いろんな意味で。逆に言うと、似ている中で差異というものを探すことができる社会でもある。「近いアジア」というお話で言うと、やっぱり近かったわけですね。近かったからこそ、「この国を同化できるだろう」というふうに、恐らく大東亜共栄圏のときに考えたわけであります。

恐らく、その近さにも幾つかのレベルがあって、例えば日本が植民地化をした2つの社会、台湾と朝鮮半島に対して、現地の総督府というのは微妙に違う方針を取っていて、台湾が比較的旧慣尊重主義に傾いたのに対して、朝鮮総督府というのはものすごく強い同化主義を出していった。この差というのは恐らく一最近そういう作業がわりとはやっていますけれども一日本人にとって、台湾人を見た瞬間と朝鮮人を見た瞬間の距離感が違ったのだろうと思います。朝鮮人を見たときに、「こいつらとは一緒のようにやっていける」と多分思ったわけですね。そのように思った瞬間に、非常に激しい同化主義が出てきて、ものすごく強い差別を引き起こしたと。だから、朝鮮統治が台湾統治に比べていろんな問題を引き起こしたというのは、そういうこととも恐らく関係はしているだろうと思っています。

私は、東アジアの比較研究をずっとやろうと思っているわけですが、これは案外やっている人の少ない作業です。それぞれの分野で、中国研究もしくは韓国研究、もしくは朝鮮半島の研究というのはいっぱいあります。これは、東洋史の中でも思想史以来、つまり漢学の歴史以来ずっと歴史のある研究分野ですから。日本の中国研究なり朝鮮研究なりの研究水準というのは決して低くない、相当なレベルまであるわけですね。ですから、その伝統を受けて地域研究というのは非常に発達しているんですが、こんなに近い地域でも、それらの地域研究をクロスオーバーして両方の地域研究を含めた形で中国と朝鮮半島をつき合わせるというような作業というのは案外行われていないんですね。この間アジア経済研究所で、「韓国・台湾の発展メカニズムを比較をする」という研究会に何年間か参加しまして、それが成果になって本に

なっているんですけれども、それだけの試みでも非常に画期的なんです。つまり、地域研究者がそこのフィールドを離れて、隣の地域の研究者と相当長い間顔をつき合わせて議論をして、お互いの持っている地域のフレーバーみたいなものを共有をしていく。これは実は相当難しいことで、それに関して東アジアでもようやく始まったばかりというような感じがしています。

そういうことをやるとどういうことがわかるかというお話をちょっとして、「それをもう少し広げなければいけないんだ」というような結論にしていこうと思うんですが、どういうことがわかるか。私が今までやってきた話というのはジェンダーの話とかなので、そういうことを少し申し上げると、「ジェンダー」なんて言うと、大体儒教文化圏は、大体大ざっぱに欧米とぼんと比較されたりすることが特に欧米の文献の中では多くて、日本というのが、例えば中国や韓国と比べるときにどういう特殊性を持っているかなんていう議論というのはあまりなされていないわけですね。そういう点というのが、地域研究をつき合わせるぐらいのつもりで見ていくと、わりとクリヤーに出てくるというお話であります。

「儒教文化圏」と言われているけれども、儒教の浸透度には恐らく相当な濃淡の差があって、そういうのがいろんな形で出てくるわけですね。

実は、学歴別の労働力率というのは、ものすごく計算のややこしいデータで、「こんなのはそれぞれの国の統計を持ってくればいいだろう」と思われるでしょうけれども、統計の取り方がそれぞれ違ったりしますし、労働力率の計算自体も微妙に違うケースもありますし、これを計算をするのは実は相当にややこしい手続きが必要です。そんなにぱっと出てくるようなデータではないんですが、やってみると非常に顕著な見事な差が出てきて、台湾とアメリカはほとんど同じなんですね。韓国は全然逆の方向を向いていて、日本がその中間にあるということが出てきます。

私は学歴別の労働力率がどういうふうに変化をするかというのは非常に重要なことだと思っていて、学歴が上がったときに女性が働くほうへ向かう社会と、学歴が上がったときに女性が主婦になる社会というのは、決定的に恐らく女性の社会進出とか言われるような現象に関して、方向性は逆を向いている社会だと思うんですね。高学歴層が働くというのと高学歴層が主婦になるというのでは、主婦の持っている社会的な地位というのは全然逆になりますから、恐らくそれから先、いわゆる女性の社会進出と言われるような現象が進んでいくのか、どちらかというとそれが進みにくいのかということに関しては対照的な方向性を持っていると思われます。だから、台湾というのは、そういう意味では日本以上に女性の社会進出が進みやすい社会だということがわかるわけです。これだけを見て本当にわかるかという話もありますが、いろいろ見ていくと、本当にそういうことが一応わかることになっています。

ちなみに、そういう話をずっと延々やっているんですが、同じことは中国と北朝鮮にも言えて、「同じように社会主義で、同じように女性は働いているではないか」とお思いでしょうけれども、その働き方というのはやっぱり全然違っている。はっきりしたきれいなデータはないんですが、少なくともジェンダーのことに関して言うと全然違っている。中国というのは世界一男性の家事労働が長い国なんですね。これはわりとデータで取れます。大体女性の家事労働時間の３分の２、男性が家事をしている国というのは、世界にほかにありません。北欧が大体多くても半分ぐらいですから。ちなみに日本は10分の１で世界の最下位グループに属しますけれども。そういう意味でいうと、中国の男性の家事参加というのは非常に顕著なんですね。ところが、北朝鮮というのは、それがほとんど見られない国になります。

北朝鮮に行かれた方は、もう一目でわかると思うんですが、北朝鮮の女性というのは、都市部ではみんなスカートをはいているんですね。私はスカートをはいた社会主義というのは非常に奇妙に感じましたが、それは中国のイメージがあるからなんですね。中国というのは、やっぱり文革のころを含めて、男女の差がないということを強調したカルチャーで、いまだに中国国際航空のスチュワーデスはズボンをはいているんですよね。スチュワーデスがズボンをはく航空会社というのも珍しいと思うんですけれども、そういうような、要するに服装に関しても、性別というのはあまり意識させないほうにどちらかというと圧力をかけた社会、そっちのほうに向かおうとした社会なのに対して、北朝鮮というのはやっぱり伝統的な儒教の影響で、性に基づく差異というものを非常に強く残そうとした社会だというふうに考えられます。

ですから、台湾と中国、韓国と北朝鮮というのは、そういうふうに、「体制の違いを超えてやっぱり同じ社会なんだ、もともとは」というのが、こういうのでやっていくと、非常によく見て取れます。社会主義だ、資本主義だなんていうのは、しょせん土着の社会の上に接ぎ木をしただけのものであって、接ぎ木の根っこにあるものというのは、やっぱり共有しているんだなというのを、特にジェンダーなんていうテーマだと非常にきれいに見ることができます。

そういうことを比べると、日本の特殊性というのは―これはいろいろ長い話があるのではしょって申し上げるので違和感があるかもしれませんが、日本の特殊性というのは、恐らく儒教だとか何とかと言われるようなものではなく、恐らく大正期に出てきたような母役割規範だと思います。これは日本の伝統でも何でもなくて、大正時代から急に、生んだ子供の面倒をお母さんが見るようになるわけですが、それが非常に強く受け入れられてしまった。そのことの１つの理由は、日本の場合には、夫の両親との同居が一般的であるということです。そういうところでは、近代家族の誕生のときに、恋愛結婚というのがあまり生まれないんですね。近代のときに、自由な恋愛、自由な性愛というのが空間としてあまり成立しない。ですから近代家族が生まれた日本の大正期に、

決して恋愛結婚が主流にはならなかった。これは、近代家族の誕生と恋愛結婚の誕生がずれるという、英仏ではあまり起きないことなんですね。英仏というのは基本的に結婚と同時に別居する社会ですから。したがって、夫婦間の愛情というのが発達することが阻害されて、母親の持っていた情緒的なエネルギーというのが基本的に子供に向かってしまったということが、多分１つの特徴なのだろうというふうに私は考えています。その話は、あまりこの話に関係ないので、先に行きます。

次に組織の話です。ジェンダーのお話も絡んで、「ほかにもこんなネタがありますよ」という話です。単に集団主義だ、個人主義だというのはよく言われますけれども、確かに個人主義ではないという意味では、東アジアというのは多分全部そうなんです。つまり個人という原理を持たない社会なのですが、その中でも集団原理なんかにはいろんな違いがあって、そういう話で大体、園田先生なんかがやっておられるような、進出した企業の摩擦なんていうのが説明できたりするケースもたくさんあるんだろうと思います。例えば、よく言われる話ですが、血縁原理の濃淡。つまり、日本の社会というのは、優秀な丁稚を取って勝手に養子にするなんていうことができたわけですが、中国や朝鮮半島にとってみれば、そんなことは獣のやることで、血縁も何もないような人間をいきなり養子にするなんて恐ろしいことは絶対にできないわけですね。ですから、例えば日本的経営という形で、「日本の産業化に日本の家族規範というのが機能した」なんていう議論なんていうのは、やり古されているほどいっぱい出てきます。

それだけじゃなくて、例えばさっきの儒教の濃淡ということとかかわるわけですけれども、朝鮮半島というのは、肉体労働に対する非常に強い忌避意識をまだ持っている社会で、生産労働、いわゆる工場の現場で働いている労働者の平均賃金を、全体と、生産職と行政職、それから生産職の男性と男性全体というふうに、いずれも比較してみるわけですが、いずれも韓国と台湾で比較をすると、明らかに韓国のほうが職種間の差が大きく出ていくわけですね。もう１つ、販売、物を売るということに関しても非常に大きな差が出てきます。こういうように、物をつくったり物を売ったりということに対する忌避意識というのが、韓国と台湾の中で比べるだけでもわりとクリヤーに出てくるというか、韓国社会が持っている、儒教によって、いろんな労働供給が少しほかの社会と違うような形になっているというような側面が、こんなデータで少し確認をすることができます。

あとは「年齢階梯秩序」というお話ですが、私たちにとっては当たり前のことですが、先輩・後輩関係というのは、我々は非常に内在化をして生きています。ちょっと年が上になると、敬語を選択して、例えば学校の卒業だと、何期卒業なんていう言葉があって、それでずっと組織がつくられていく。それは日本の組織原理にかなり深く組み込まれていて、したがって、年功序列というのは、あんまり外してしまうと、日本人にとって恐らくしんどかったんだろうと思うんですね。つまり、あんまり若い人が上司にいきなり来るなんていう組織原理を取ってしまうと、我々が普通に慣れてきた敬語の世界とか何とかというのから余りに離れてしまうために非常にやりにくかったということが恐らくあるのだろうと思うんですね。そういう関係というのは、実は世界的に見ても、そんなにいろいろな所でやっていることではなくて、中国にもあまりない習慣です。これは兄弟間の差別というのが非常にある社会でのみ起きる現象で、長男が偉いところでないと、こんなことは起きないんですね。均分相続をやるような社会ではあまり起きません。中国にもないわけではないんですけれど、あんなに先輩、後輩という形で組織化されるようなことは普通起きません。これは朝鮮半島にはしっかりあって、わりと日本よりも強いような形でこういうのが見られます。そういうところとそうでないところで、恐らく組織原理なんていうのは変わってくるだろうとかいうようなことを、多分東アジアの中で比較をしていくことで、いろいろな違いが見えていく。その違いをちゃんと認識して相手とつき合うというのが非常に大事なことで、そうしないと戦前の大東亜共栄圏みたいなことが多分出てくるのではないかというふうに思っているわけですね。

ここまでは東アジアの中のお話で、この先は「その上でどういうふうにしましょうか」という話なんですが、私は東南アジアとか南アジアの話なんて何も知らないのであまりいろいろ言えないんですが、例えば東南アジアだと系譜観念が東アジアほど強くないとか、パトロン・クライアントの二者間関係だとか、いろいろありますが、少なくとも東アジアのような一貫性をあそこに関して見て取るのはちょっと難しいと思うんですね。それから、南アジアのカーストのような階級的差異というのも、東アジアには、あまりああいう形では一般化しない。「人間が死んだ後に何になっているかわからない」というような死生観も基本的には東アジアは持っていない。東アジアでも、仏教を受け入れているんですけれど、その死生観の受け入れ方が完全に儒教寄りになっているとかいう、いろんな現象があるわけですね。

要するに言いたかったのは、比較研究をつき合わせるということが、東アジアに関してまでは何とか可能のような気がするんだけれども、これを東南アジアとか南アジアでつき合わせるということは、まだやっぱりできていないのだろうというふうに思っています。それは、１つには変数をコントロールするということがものすごく大変で、そんなことが果たしてそんなに簡単にできるのだろうかということ自体も含まれるのですが、大体やっているうちに、「それではオーストラリアはどうなるんだ」とか「アフリカを入れたっていいじゃないか」という話が多分すぐ出てきてしまうのです。同じような論理でなかなか括れないようなところなのだろうと思うわけです。

ただそれでも、多分園田先生のやっていらっしゃるようなことというのは、こういうことにもかかわってくる

のだろうと思うのですが、交流論という形の議論の仕方というのはいくらでもできて、これはいくらでもゲリラ的に広がっていくような話で、人の往来がふえていけば多分そういう議論が出てくる。今ごろになって「アジア、アジア」と言い出したのも、恐らくそのせいで、日本が戦前に大東亜共栄圏といったのも、まさにそのせいなわけです。つまり、そういう交流の必要ができたときにそういう議論というのはできてきて、実際に人の動きができてくると、何かそれが1つのまとまりを持っているような錯覚が生まれてきて、そういう議論が出てくる。

例えば浜下さんのやっていられる東洋史の作業というのは、東洋史の中ではある意味で珍しい作業だと思うんですが、香港を中心にして、つまり中国と東南アジアというのがどういうふうにリンクしていったかというような作業をずっとなさっているわけですね。そういう意味で考えると、そういう交流論みたいなものをてこにして、少しずつ比較研究をすり合わせていくということは恐らく可能なのだろうと思います。

交流論の中でいうと、先ほどから出てきたような消費の話などは、今の文脈では非常に重要で、例えば漫画というメディアは、恐らく日本を中心として発信されながら、少なくとも東南アジアぐらいまでの地域にはものすごい勢いで広がるだろうと思うわけですね。それから音楽もそうで、これは橋爪先生なんかがやってらっしゃいますが、例えば中国産のロック。北京語のロックというのは、ここ10年ぐらいの間にものすごい市場になる可能性が多分あって、アジアのマーケットみたいなものがひょっとしたらできるのかもしれない。

私自身は、本当は交流論でとどまっていてはいけないと思っていて、つまり交流論というのは、「こうこういうふうな人の動きがありますよ」というところまでで、中のフレーバーまで突き詰められないというふうにやっぱり思うわけですね。何か、国際関係論みたいなものの類似品のような感じで。交流論というのは1つの手がかりで、交流論を手がかりとして地域研究をつき合わせられるぐらいのものというのを、アジア全体一というか、最低限少なくとも東アジアと東南アジアというのが次のステップだと思うんですが一に関して、きちんとできたときに、やっぱりアジア・太平洋の研究というのが一歩進んだ段階に行くのではないか。それはかなり大変なんだけれども、やっぱり次のステップとしてはやっていかなければいけないのではないかというふうに私自身は考えております。済みません、少し長くなりましたが以上です。

渡辺： どうもありがとうございました。

続きましてジョン・リー先生のほうから、報告をいただきたいと思います。

他の先生方は、国籍がともに日本の人であります。ジョン・リー先生について言いますと、先ほど瀬地山先生から出ましたように、Korean-Americanということでよろしいんですよね。英語が第1言語でありますけれども、なぜか日本語が堪能なので日本語でやってもらいますが、決して日本人でも何でもありません。

妙な言い方なんですけれど、今私たちがここで考えようとしていることは、それぞれの立場から皆さん今言っていただいているわけですけれども、アジアをとらえる視点とか、あるいはアジアをとらえるパラダイムということで出しているわけで、それぞれの研究の姿勢とか立場とか、やっているフィールドとか、あるいは理論の一般性、特殊性、いろいろあるんですけれど、ちょっとそこと違うのかなと思うのは、ジョン・リーさんの場合は、要するにethnic identityがどこにあるのかは知りませんけれども、民族的にはKoreanというものを抱えながら、アメリカの中でアメリカ人として育ち、生活をして研究者をやっておられる。そして日本に招かれてきて、アジアのことについてどうとらえるかをしゃべるというのは、何かものすごく面白いんじゃないかと思って来ていただいたわけですけれど、その辺につきまして、いきなり理論的な立場についてお話しいただく前に、その辺の視点ですね。別に個人的なことをおっしゃっていただく必要はないんですけれども、その辺のパースペクティブがかなり面白い状況にあるので、そこにちょっとコメントしていただいた上で話に入っていただければいいと思うんですが。

やりにくくなければ。

リー： やりにくいです（笑）。

渡辺： よろしくお願いします。

リー： 何か、「アジア研究に関するパラダイム転換」とか、そういうことについて話してほしいと伺っていたので、まず堅い話で、僕の図でやらせていただけますか。

渡辺： 何でも結構です。よろしくお願いします。

リー： ここで何を話していいかちょっとよくわからなかったのですが、きのうの打ち合せで、やはり何かアジア研究におけるパラダイムの問題とかについて話してほしいというので、きのうホテルの部屋に帰って考えたものを話します。

アメリカにおける地域研究というのは、冷戦中に国家安全機構の1つとして育ったわけですよね。大まかに言えば、世界を4地域に分けたわけですね。アジア、中近東、アフリカ、中南米です。フォード財団、ロックフェラー財団、もしくは国家のいろいろな財政からお金を出して、いろんな大学にアジア研究なり、アフリカ研究なり、センターや学部をつくったわけですね。今となって50年経ったら、一流大学だけじゃなくて、二流、三流大学でも至るところに地域研究があります。例えば私が努めているイリノイ大学というところでも、一応東アジア文化学部というのがありまして、20名以上教員がおります。その中には意外と名が知れた日本研究者なんかもいるわけですね。ほかにもアジア研究センターというのがあって、ここにも80人ぐらいが所属しているわけですよね。東アジア研究をやっているのが50人ぐらいいて、あと東南アジアが20人ぐらい、そして南アジアが10人ぐらいいるわけですね。

この例を出したのは、簡単に言えば、一応アメリカにおけるアジア研究とか地域研究は成功したと言ってもいいような気がするわけですね。成功したかどうかはともかく繁栄していることは確かです。パラダイム的に見てどういうふうに繁栄したのかというと、大まかに言って2つの見方があると思うんですよね。1つは従来の地域研究、つまりエリア・スタディーです。方法論的にはどういうふうになるかというと、特殊論がつきまとうわけですよね。オリエンタリズムの伝統を受け継いで、各国、各文化の特殊性を研究しようとする。人文系には魅力ある方法ですね。もう1つの方法というのが、普遍的な見方、つまり社会諸科学の方法、理論などを使って分析するやり方です。こういうやり方は、究極的に見ると別に地域研究でなくても何でもいいわけですよね。特に近代化論、マルキシズムが支配したような観点では、特に地域研究をやる必要はないわけです。つまり、先進国を見ていれば、段階的に後進国が先進国のまねをするんだから、特に地域研究をする必要はないと。「でも比較研究をやったほうがいいんじゃないか」ということで、たまに何人かいるわけであります。

ここの知的根源が何かというと、ちょっと学説史ふうになりますが、人間学の形成において、19世紀末にいろいろなディシプリン(discipline)、○○学がつくられたわけですよね。先進国の研究については、一応政、経、社、つまり政治学、経済学、社会学の3通りに分かれたわけですね。後進国の研究のためには2つに分かれるわけです。1つは、文字が使われてない社会は人類学の皆様に研究していただこうと。あと、後進国の中で文字、つまりある程度文化が発達しているようなところにはオリエンタリズム、つまり東洋学ですね。東洋学自体2つに分かれますけれど、アラブ諸国とアジア諸国です。この普遍論と特殊論というのは、今アメリカでは共生しているんですね。しかし、一般的にいって、地域研究においてはオリエンタリズムがすごく強いわけです。

私の見解からして言えば、両方ともすごく学術的には問題があると思うんです。つまり、根本的に視点の問題があると思うんです。例として日本学のことを言いますと、ルース・ベネディクトの「菊と刀」に象徴されるように、日本人論には特殊論が多いわけですよね。アメリカの中でも、土居健郎さんの「甘えの構造」とか、中根千枝の「タテ社会の人間関係」とか、そういう本を通じて日本社会が紹介されるわけですけれど、学術的に見て面白いと思うのは、土居さんも中根さんも、一応学術的には西洋社会科学にすごく影響されたわけですよね。土居さんの場合精神分析ですね。中根さんの場合はイギリスの機能人類学という形で。

しかし、僕が問題にするのは、日本のケースを分析する場合、日本社会には精神分析の枠組みやイギリス機能人類学の枠組みが当てはまらなかったというわけですね。だから日本特殊論になってしまったということですね。つまり、西洋社会においては、こういう普遍的な枠組みがある程度通用すると思っていたけれども、日本を見たときには通用しなかった。だから特殊論をつくらなければいけないというロジックで一応日本人論なんかは形成されていると思います。

簡単に言えば、社会諸科学というのは、究極的に言うと西洋社会学、つまり西洋社会論になっているんですよね。特にアメリカの場合アメリカ社会論。だから「社会学」という場合、普遍の名前でやっているわけだけれど、実際にはアメリカ社会論になっている。だから、その反対として、日本なんかを研究する場合、やっぱり日本社会論になってしまう。普遍という名前でやっているわけではなくて特殊論になってしまうわけですね。だから、私から見れば、オリエンタリズムと社会諸科学、オキシデンタリズム(Occidentalism)は両方とも同じようなものなんですね。どっちも社会論になっている。普遍的なものはおよそ共生してないんじゃないかと。

学術的に言うと、これをどう解決するかというと、2通り方法があると思うんですよね。

1つは比較研究をする。つまり、こういう日本人論なんかを論じる場合、普通の学者はやっぱりアメリカと日本を比べているんですよね。だからよく言われるように、日本は狭い国だというのは、アメリカに比べればもちろん日本は狭いわけですよね。しかし韓国、台湾、もしくはヨーロッパ諸国、つまりドイツとかイギリスなんかと比べても、べつに同じような面積を持って、人口も日本のほうが多いわけです。あと、日本は甘え社会だとかタテ社会とかというのも、さっき瀬地山さんが言ったように、韓国にも同じようなことが当てはまるわけですし、あと、よく「日本は島国であるから閉鎖的だ」という論理が通じますけれど、台湾なんかに行くと「島国であるから開放的」という逆の理論になってしまって、反対に言えば、両方ともしょうがない論理になってしまうんですよね。

比較的に見るというのは、相対的に見る、つまり日米のaxis(軸)を崩すべきではないかと思うわけですよね。だから、特に西洋社会を見る場合、普遍論として見るのではなくて、それなりの社会の特殊性もあるわけだから、何が特殊で何が普遍なのかは、こういう日米というaxisを崩して、オリエンタリズム、オキシデンタリズムのaxisを崩して比較的に見なければ、よく見えないんじゃないかと思うんですね。

もう1つは、90年代になりますと、社会そのものの仕組みがすごく変化しつつあるわけですね。グローバリゼーション、私はトランス・ナショナル化とよく言うんですが、つまり国民国家単位としてのゼネラリゼーション(一般化)が非常に難しくなってきていると思います。ある意味では不可能じゃないか。つまり、日本社会を研究する場合に、日本の国境の中だけを見ても、それで具体的に日本がわかるのかという気持ちがありますね。これはなぜかというと、2通り考えることができます。

1つは日本の中のグローバル化ですよね。例えば静岡県だけを見ていても、外国人が多いし、あとは在日中国人、韓国人、部落の問題とか、その中の多様性、つまり日本人だけではないグローバル化、トランスナショナル

化が進んでいるわけですね。おまけに海外に行きますと、日本人、日本企業が非常に進出しているわけですね。だから、日本の外の日本。つまり、よく中華に言われることですけれど、日本人も世界中にいるわけですよね。バンコクに行っても4万人、5万人の日本人コミュニティーが存在するわけですね。これは例えば不平等研究、stratification researchなんかに関しても、つまり日本の中だけの不平等研究はできないわけですね。つまり、日本の企業が例えば東南アジアに進出しているのだから、この労使関係は、東南アジアの労働者も見なければいけない。おまけに東南アジアや世界各国に進出しているマネージャーも一応日本社会の対象にならなければいけない。つまり、国民・国家だけを見ても日本社会の全体像はわからないということですね。具体的に、ネットワークが国境を越えているんだから、つまり国民・国家だけを見てもしょうがないと。

次に、何か日本の研究者の役割みたいなことを話したいんですけれど、先週はタイのバンコクで会議があって、「東南アジアにおける日本研究」というテーマだったんですね。東南アジアの研究者は日本研究をやっているわけですが、ほとんどアメリカで博士号を取って、みんな英語で議論しようとするわけですね。おまけに日本人の学者は呼ばないという、しょうがないことなんですけれど、結論的に言うと2通りあると思うんですよね。

1つは言語の問題ですね。きのう林さんもそうおっしゃっていましたけれど、日本研究をやっていても日本語でやらないわけですね。つまり英語で議論しようとする。英語の文献が欲しい。日本語の文献を送っても読めない。だから、日本の社会科学者が貢献するためには、ある程度言葉が通じなければ何にもならないわけですよね。だから、アジア・フォーラムをやるといっても言語の問題がすごく大きいと思います。

もう1つ言えるのは、さっきのこととちょっと矛盾するような気もしますけれど、地域比較研究といっても、特に社会学者がやる場合には、何か、悪い意味での、「観光社会学」というのかな。「ツーリスト社会学」というのかな。つまり、現地言語も身に添けてなくて、簡単にぱっと見て、2～3週間いたら「ああ、この国はわかったよ」なんていうふりをして、何かいろいろ本を書くわけですね。よく日本の本屋なんかへ行って新書なんかを見ると、「ドイツに関して云々」とか「タイに関して云々」という本が置いてある。どういう基準でタイについて書かれるのかというと、「私は去年3週間ぐらいタイにいました」ということで1冊書ける。こういうのはやっぱり問題があるんじゃないかと思いますね。つまり、タイの人とタイ語でしゃべれなくて何がわかるのかと。

これに関連しているかもしれませんけれども、日本の地域研究、社会諸科学は、批判的な意味で言うつもりはないんですけれど、応用されないわけですよね。というのは、アメリカだけじゃなくて、ヨーロッパだけじゃなくて、東南アジアでも通用しないということになってしまうんですよね。私自身は、日本の研究者には優秀な人が多くて、それなりの貢献ができる人が多いと思うんですけれど、しかし海外での評判はすごく低いわけですね。例えば韓国研究なんかやってみましても、国際会議をやっても日本の研究者はあまり呼ばない。アメリカ、フランスあたりからは呼ぶけれど日本の研究者はあまりよく思わない。ロシア研究なんかも同じだし、東南アジア研究でも同じですよね。さっき言ったバンコクの学会でも、日本研究なのに日本の研究者は呼ばないという事態が出てきます。

最後に、パラダイム転換の話になりますけれど、初めに言ったように、アジア学の半面には、冷戦の国家安全機構の問題があったわけですよね。そこで最近至る所で議論がありますけれど、「冷戦以降のアジア学はどうなるか」「冷戦以降のエリアスタディはどうなるか」ということが問題になってきています。

なぜ問題になってきたかというと、2つの問題があると思います。1つは、冷戦後における財政危機。大学がすごく困っているわけですよね。お金がないから、つまり財団からの貢献もなく、国家からの援助もなくなっていくので、東アジア研究センターとか学部は解体されるつあるわけです。そのかわりに何を入れるかという問題が1つ。

もう1つは、知的な問題で、エドワード・サイードの「オリエンタリズム」に象徴されるように、アメリカの学会の中で非常に地域研究の批判が行われているわけですね。postmodern系統のcritic(批評家)も多いわけですけれど、一般的に言って、いろいろな議論が生じるわけです。例えば、さっき足羽さんもおっしゃったように、地域の定義が揺らいでいるという問題ですよね。さっき言ったように、「アジアとは何ぞや」という問題について、インド研究をやる人がアフリカ研究をやっている人と共同研究をやったり。つまり、インド洋でどういうつながりがあったとか、あとは中国研究をやっている人がインド研究をやり始めたり、韓国研究をやっている人は、diaspora study、つまり韓国人の移民の研究をやったりしているわけですよね。だから、それぞれ国境の中の研究はやらなくて、国境外、つまりさっき言ったようにトランス・ナショナル化された世界を研究の対象にしているわけですね。

もう1つのテーマとしては、今まで見られなかった、つまり、○○国論、○○文化論で見られなかった部面がすごく議論のもとになっているんですね。これはジェンダー、階級、民族とか、いろいろな問題があります。つまり、簡単に言いたいのは、オリエンタリズムの批判の中にあって、従来の地域研究が崩れかけているということなんですね。つまり、さっき園田さんが言ったのかな。アジアは遠くから見れば同じに見えるわけですよね。これは無知から生じるようなものと思うんですけれど、一般的に言って「本質を探ることはもう不毛である」というのが一応のコンセンサスだと思います。つまり「○○社会、○○文化の本質とは何ぞや」という、つまり「アジアとは何ぞや」という、さっき足羽さんも同じようなことを言ってましたけれど、そういうたぐいの質問は不毛なアンサーしか出てこないということですよね。

だから皆さん、地域研究をやっていても、リストラをやる必要をすごく感じています。この機会に、社会科学の中にも同じように、同時に変革が進んでいるわけですよね。つまり、固定されたディシプリン、つまり政治学、経済学、社会学、人類学の枠組みを超えるような研究をやろうとしている人が多いわけですよね。だから簡単に言えば、地域研究、社会諸科学にもパラダイム転換の時期がやってきたという認識を持っているわけです。

この機会に、私としてみれば、専門化があまり進んでいない日本人の研究者が貢献する可能性があるんじゃないかと思っています。同じようなことを東南アジアで言ったら、「あなたは何も知らないんです」と言われましたけれど。でも、日本の研究者の場合、意外と蓄積があるので、そういう知的貢献ができるのではないかと思って、こういうフォーラムにも参加したと。終わりです。

渡辺： 何か、いろんな問題を投げかけてもらいました。

もともと予定している時間に、まだ少し時間がございます。今それぞれの先生方、それぞれのスタンスでお話しいただきましたが、パネラーの先生方同士で、いろいろご意見もあろうかと思いますが、今とりあえず発表にかかわることで、「そこは違うのではないか」とか「黙っていられない」とか何かありましたら、出してもらったらどうかと思うんですが、いかがでしょうか。

橋爪先生、何かありましたら。

橋爪： 皆さんの発言、大変面白く聞きまして、足羽さん、園田さん、瀬地山さん、ジョン・リーさん、私とほぼ認識が一致しているというか、同じようなことを考えているなというふうにを思ったんですが、私が大変に重要だと思ったのは、ジョン・リーさんのご指摘で、「日本人の学者は学力が低いわけではないのだが、外国では全く相手にされていないらしい」と(笑)。「そうだろうなとは思っていたんですけれども、やっぱりそうだったか」ということが重要だと思います。

「学力が高いんだからいいじゃないか」というふうに言えないのは、アジア研究の場合、アジアの国々に情報を発信して、そこで役立てていただくのでなければ、その目的の半ばは達せられないわけで、日本語で研究し、日本人にそれを普及させて、私たちのアジア認識が高まったとしても、「では何だ」ということがあるわけで、投資に役に立つというところで終わってしまうわけですね(笑)。その次のステップというところを見据える以上、専門家がアジア言語を勉強するのは当然として、もう少し広い範囲で、専門家の卵である学生たちとか一般の人たちに、言葉とか日常交流のレベルでアジアの情報が入っていくというプログラムとか、呼ばれなくても押しかけていって外国でさまざまな活動をするとか(笑)、何かちょっと考えないといけないなと思います。こういうことの一助に、このアジアフォーラムがなっていけるのかなというふうなことをちょっと考えさせられた次第です。

足羽： その並びで言いますと、ただそういうことが起きているのが日本だけじゃないということですよね。外国でPh.D.を取ってきて、アメリカやヨーロッパの大学で教えるか、国へ帰ってきて教えるかといったことを考えている英語を話す人たちの中で議論されているアジアの問題とアジアで暮らす一般の人々の抱えている問題との間に齟齬が生じてきているんですね。例えば私、先週スリランカに行って帰ってきたんですが、スリランカでは、英語で話す人たちの間では民族問題は全部解決しているんですよね。ところが、なぜいまだにそうなっているかというと、英語を話さない、話せない人たちの階層の問題が、英語を話す人たちの西洋のフレームワークか、オキシデンタリズムのふりかけをかけた物の見方か分かりませんが、そうしたものの中では分析できなくなっているんですよね。日本人の学者は英語が苦手なので外へ出ていけないとか、そういう話がリフレクション(反省)としてはあるんですけれども、同じようなことが、タイでも中国でも、インドでもスリランカでも、どこの国でも起きている。

それをどういうふうにするのかというところが非常に大きな問題じゃないかと思うんですね。単に英語を話すようになれば交流ができてどうのというだけではないような気もします。話せない人たちの中で持ち上がっている民族問題なりナショナリズムといったものをどういうふうにするのか。

それともう1つ、これは後半で言いたかったことなんですけれども、いつも出てきた問題の1つとしては、現地の言葉がよく出来るようになると何が出てくるのか。それが地域研究の問題として出てきたんですが、その現地の言葉を話す人も、またそれを研究する人も、例えば韓国語なりシンハラ語なり中国語なりをよくする人たちがそこを研究して、どういった学術研究をしてくるかというと、非常にエッセンシャリズム(本質主義)に陥りやすい。「韓国はこうである」とか「儒教文化はこうである」。あるいは「ヒンズー文化はこうである」というような、現地言語がよく出来ればエッセンシャリズムに陥りやすくて、現地言語があまりよく出来ない、あるいは英語だけでやろうとすると、英語を話すintellectualのフレームワークに非常に陥りやすい。国の中で出てきている知的な声というものと、それを理解しようとする外側の声というものと言語というのは、非常に複雑に絡み合っている。そこら辺がわかってきたというだけでも最近はいいとは思うんですが、それを問題として前に出した場合にどうしたらいいのかというのが非常に大きな問題として出てきているんじゃないかなと思います。

渡辺： ありがとうございます。

園田： ちょっと続けて言いますね。多分足羽先生の今の話にも絡むんですが、これは最近中国の中で非常に顕著に見られる傾向でして、特に社会学者の中での交流で。彼らと話すときに、僕はいつも「日本人の研究パートナーはいる？」というふうに聞くんですが、大体「いない」と言うんですね。「どうしていない？」と言うと、「だっ

て、彼ら英語できないじゃない」という話になりまして、「ああ、そうか。『英語ができない』というロジックを使うのか」と妙に感心してしまうんですね。それは多分中国の１つの変化を指し示すんだろうと思うんです。

それは、つまり我々が、先ほどの瀬地山さんの話じゃないですけれど、漢学の、日本なら日本のある種の伝統というか蓄積があって、少なくとも文字ではよくわかる。あるいは、それをワンステップ行ったところに、例えば中国なら中国の研究に関しては、「中国語ができて当然だ」となる。ところが、逆にそういう言語を選択することによって切られる部分もある。先ほど僕は「土着化と普遍化」という形で言いましたが、土着化を選択することによって、多分土着化を選択する基本的な価値によってでき上がるある種のイメージというのが多分そこであるだろうと。

それでは英語ができさえすればいいかというと、実は英語ができる人間というのは、少なくとも僕が見た範囲内で申し上げると、極めて問題の立て方が、非常にスマートではあるんですが、あまり土臭くないといいますか。逆に言うと、研究戦略として、ある種の土臭さを求めると、英語というのは、ある部分で、情報がゆがむとは申しませんが、ある情報へのアクセシビリティーにとってはあまりよくない効果を持っている。本来ならば、その両方、あるいは幾つかのオプションを持ちながら研究というのはやっていくべきでしょうし、それぐらいのオプションがないと、ある種の深みのある研究ができないのだろうと思うんですが、これが先ほどの、「それを大学のカリキュラムでどうするか」という話になりますと、熱意を持って我々が語るのはいいんですが、我々が熱意を持てば持つほど大体学生さんというのは冷めていって、「要するに必修科目が多くなるわけですよね」というので嫌われちゃうという傾向も感じざるを得ないという（笑）。ちょっと話がまとまりませんが、そんな感じです。

渡辺：　今、泥臭くなるという話のときには、例えばその国の持っている文化の固有性といいますか、そういうものがすっぽ抜けちゃうという感じですか。「英語に一旦変換されると、みんなスマートになってしまう」という言葉の、もう少し意味を知りたいんですが。

園田：　具体的な表現は幾つかあると思うんです。例えば、ある学術のスタイルはこうでなければならない。例えば、ある種の命題を出して、それを検証するスタイル。「それ以外のある種のオブザーベーションというのは、そもそも学術的な意義がない」というので、彼らとの話の中で、つまり我々からして第１次情報として必要なことがあまり出てこないというのが１つの可能性です。

２つ目は、彼らが日常用語の中で出てくる言語をそのまま利用することによって、何とも言えずよくわかる言葉が、これはあまりいい例ではないんですが、中国語で言う「関係」というものと「relation」というのは、やっぱり全然違うんですよ、意味合いが。ですから、このrelationということだけで話をしていると、要するに腑には落ちない理解の仕方ができてしまうといいますかね。そういう２つの、つまり研究戦略にかかわる部分、あるいは情報にかかわる部分と、それをどう解釈するかみたいな部分の両方が入ってきて、その英語でできる部分で、少なくとも我々に伝わってくる部分というのが、必ずしも、今申し上げたような、これもなかなか表現しにくいんですが、ある種の土臭さが伝わりにくいというふうに思います。

渡辺：　そうすると、例えばさっき足羽さんの話でもあったんですけれど、英語ができる人というのは、割合アメリカとか欧米でPh.D.を取っているような人が多いわけですよね。そうでない人もいるでしょうけれど、ジョン・リーさんがいるからあれですけれども、特にアメリカの場合、Ｂ級の博士論文のマニュアルみたいなものがあって、それが思考過程そのものを縛っているようなところがあるような気がするんですね(笑)。非常に単純な因果関係の仮説みたいなものを立てて、それを検証すれば博士号を出すみたいな感じに毒されている一と言うと変ですけれど、その命題の立て方を、アジアのいろんな錯綜した問題の中にぽっと立ててきて、ここから説明変数と被説明変数を持ってきて、仮説命題を出して、という議論の仕方をしたがるとか、そういうことが今おっしゃった前半の話。後半は、１つの単語の持っているタームの外縁みたいなところが、英語とその国の言葉でずれているという、その２つだというふうに取っていいですか。

園田：　それは非常に典型的な例ですが、例えば、これもなかなか難しいというか、言われてみればそうかなという気がしなくもないんですが、欧米の言語によって、あるいはアメリカの教育によって、要するに自分たちにとって見たいこと、あるいは見えることのイメージというのはできるわけですね。ところが、少なくとも僕からあれすると、つまりそれは中国語を母国語としない、そして英語で言ってもいいけれど、中国語によって話したほうが多分リアリティーが取れるだろうと思われる領域について、彼らがあまり関心を持ってくれない。ですから、どんなにこっちがアプローチをしていっても非常にしらけた顔をしてしまうというんですかね。そういうような部分も含めてですけれど。

渡辺：　どうも済みません。ちょっとこだわってごちゃごちゃ言いましたのは、日本研究のグループに私もちょっとかかわっていたところがありまして、「日本人論」という議論をするときに、皆さんもご承知の、「間人」とかいう、日本語でもない、何語でもない言葉を使って一とかと言うと浜口先生は嫌がるかもしれませんが、そういう間人主義というようなのが出てきたときに、いろんな言葉を、先ほどおしゃった、「関係」とか「縁」とか、何かそういう言葉を何語かにしようとすると何語にもならないというようなことを、ちょっと何人もでやっていたことがありまして、そのことにかかわったものですからちょっとこだわりました。済みません。何か座長が占有しまして。

瀬地山先生、何かありましたら。

瀬地山：　もう基本的にあんまり言うこともないんですが、英語に関していうと、多分アジアの中で英語のテレビ放送がない国というのは、私全部見たわけではないですが、東アジアぐらいしかないのではないかと思うんですね、基本的には。つまり、大体どこでもメディアの中で相当な英語放送の量があるはずですし、それから、大学教育を完全に自国語でやっていて、大学の教科書が完全に自国語で書かれている国というのも、これもアジアの中でほとんど数えるほどしかないだろうと思うんですね。日本や韓国や台湾というのはそういうのに属している国で、「英語ができないのも、まあしょうがないか」というようなところもあるんですが、だからといって世界に発信しなくてよいというわけでは確かにないでしょうから、もう少しそういう努力というのは多分必要なのだろうと。それは本当にそのとおりだろうと思います。

土着の研究一先ほど申し上げたかった１つの点というのは、地域研究がある種のエッセンシャリズムに陥るというのは、本当にそのとおりで、例えば間人主義の話にしても、それからイエ社会論もそうなんですけれども、日本と欧米という比較軸しかなかったということがやっぱり最大の問題点で、例えばそこに韓国だとか中国だとかという軸を持ってきた瞬間に、それは日本の特殊性でも何でもなくなったりするわけですね。

だから、地域研究をつき合わせていくという作業によって、もっともっとその本質主義を脱して、逆に別の本質主義をつくり上げていくということでも僕は構わないと思うんですね。日本の特殊性を切り出していくということになってもよいと思うんですけれども、もう少しシャープな議論というのがその中で形づくられるのではないかというふうに私は考えています。

それから、アジア言語のことに関して、１点だけ、私は今の勤務先で語学教育のほうも担当している関係でちょっとだけ申し上げますと、ここ５年ぐらいの間に、私の勤務先の中国語履修者の数というのは、ほぼ４倍から５倍にふえました。今では、ほぼドイツ語、フランス語に並ぶだけの選択者が中国語に関しているようになりました。それから、去年から朝鮮語クラスができて、朝鮮語に関してもスタートをした。なかなかふえないんですけれども、そういうふうになっております。900人いる中国語履修者が10年後にどういうふうになっていくのかということに関しては、ちょっと見てみたいなというふうに思っています。

渡辺：　どうもありがとうございました。

リーさん、何かありますか。

リー：　言語の問題では、ただ「英語を習え」という意味じゃなくて（笑）。

渡辺：　いやいや、それはわかっております。

リー：　簡単に言えば、「学問って難しい」ということなんですよね。つまり、どう言えばいいかというと、社会科学者として、ある程度generalizationをつくらなければいけない。しかし、generalizationとprejudice、つまり偏見とどう違うのかというと、これまた難しい問題なわけですよね。それはまたコモンセンスとどう違うのかとか。そういう感じで、「これをやればいい科学ができる」「これをやればいい社会学者になれる」ということはないんじゃないかと思うわけです。ただ、秘訣として、ある国を研究するにしても、それだけを見てもわからないんじゃないかということなんですよね。つまり比較しなければいけないし、国境だけ見てもわからない。国内だけ見てもわからないとか、そういうことです。

渡辺：　一応午前中予定しました時間がほとんど終了します。今もし「この場で発言しておかなければ」ということがなければ、何か話が中途半端な格好に終わってしまうということになるかもしれませんが、議論そのものは、お昼休みを挟みまして、１時半に再開したところでやっていきたいと思うんですが、きょうフロアーに来られた方で、ぜひ今何か言っておきたい方がいらっしゃいましたら、２～３ご意見を受け付けたいと思うんですが、いかがでしょうか。質問でも結構ですし、何か言いたいことがあればというのは、いかがでしょうか。

どなたかほかの先生方、何かございませんか。質問なり発言なり。特になければ、みんなそれぞれ発表しただけみたいな格好になりましたけれども、午前中の部会をこれで終わらせていただきたいと思います。

引き続き、きょう午前中に出された幾つかの観点を少し絞りまして、ポイントを幾つか出しまして、午後ディスカッションをやりたいと思います。フロアにいらした方々も午後のディスカッションにご参加いただければと思います。どうも２時間ありがとうございました。

（　休　　憩　）

渡辺：　それでは、時間がまいりましたので始めたいと思います。

この分科会では、きょうの午前中に、こちらにいらっしゃいます５人のパネラーの先生に、基調報告といいますか、それぞれの立場から、アジアをどういう枠組みでとらえるか。あるいはアジア地域をとらえるパラダイムということで、ご意見をいただきました。たくさんの問題点が出てきたわけですけれど、これを午後にディスカッションしようということで、先ほどお昼休みに、食事をとりながら話し合ったわけですけれど、一般的に方向性を持たないでディスカッションしてみてもあまり生産的ではないので、この県の学術フォーラムという場において、今後これから10年続けるということをにらみながら、どういう方向性を持ってこの研究をまとめていけばいいのか、あるいは展開していけばいいのかというような、多少具体性を持ったといいますか、プラグマティックな観点から意見を出し合って、そして方向性を見つけるようなことをやっていったらいいんじゃないかというような議論になりました。そういうような観点から、少し皆さんの意見を、だれに何分というようなやり方でなくて、意見のある先生方で、お互いに会話形式でディス

カスしていくようなやり方にしようかなというふうに思っております。

「静岡発のアジア研究」というようなことで、この学術会議は始まっているわけなんですけれど、これは健康長寿のほうもそうなんですが、「○○発」というのがなかなか難しいわけで、かねてから企画会議みたいなところでもそういう話は出るわけなんですが、「なぜ今静岡がアジアなのだ」というような、静岡から出ていっている企業とかももちろんあるわけですけれども、そこら辺がいつも問題になります。ただ、先ほどお昼休みにパネラーの先生方と食事をしながらの話の中で私がちょっと思いましたのは、今このフォーラムでしかない視点とか、このフォーラムでしかやれない、ほかにない研究の仕方、あるいは研究のやり方、面白い方法、オリジナリティーのある方法を考えようじゃないかというふうに、だんだん話が高まっていったところで私がちょっと思いましたのは、「静岡発」というときに、何も東海道とか静岡にこじつける必要は全然ないのであって、「あの研究は静岡というところから生まれた」というようなものであれば、それは「静岡発」になるんだなというふうに思ったわけです。

2年前にサンタフェというアメリカの町に行ったんですけれど、今皆さんもよくご存じのように、「複雑系」で有名なサンタフェ研究所というのがサンタフェにありまして、みんなサンタフェを訪れると、「ああ、ここから複雑系が生まれたのか」なんて言っているんですけれど(笑)、べつにあそこから生まれたわけでも何でもなくて、たまたまやっている人たちがあそこの場所がよくて集まっていたということなんですが、そのうちいろんな人が、「あのアジア研究はここから始まったのか」と静岡に来て思うようになればいいのではないかなどと思いつつ(笑)、先生方に、少しそういう新しい方向性を見つけてもらおうと思いますので、そんなことで午後の分科会を始めます。

今申し上げましたように、わりあい話としては、アジアに対するそれぞれの分野からのパラダイムとかそういうことに入っていくというよりは、むしろ研究の方法とか方向性ということの話題のほうが中心になっていくかもしれませんけれども、その辺で展開していきますのでよろしくお願いします。

まず、だれということではないんですけれど、皮切りに、また橋爪先生のほうからお話をお願いしたいと思います。

橋爪： 橋爪です。5分ぐらいお話ししようと思いますが、まず静岡県が、「アジア・太平洋学術フォーラム」ということで今後ずっと続けていかれるということで、ありがたいこと、大事なことだなというふうに思っています。せっかくですから、それだけの機会と資源、お金ですね。それを生かして何をすればいいか。本当は1回目ということで、前年にプレフォーラムがあったわけですから、既にスタートしてもよかったのかもしれませんけれども、今回この学術フォーラムは、プレフォーラムに続けて、いわばその相談のような形になっていると思いますので、午後の時間には、それを有効に生かして、研究のプランや進め方についてみっちり議論をするというのが有効で生産的ではないかなというふうに思います。

それで、午前、皆さんいろいろお話なさったんですが、私が印象的に思いますのは、アジアというのは、欧米の社会科学の中では1つのリージョナル・スタディー、地域研究の対象ということになっていて、地域研究をしている人たちが、アジア文化というのを研究しに、それぞれゾーンディフェンスで各地域に張りついているという学問の形態になっているわけです。こういう地域研究というレベルにとどまっていたのではだめなのではないかというふうに強く思います。というのはどういう意味かというと、彼らは、彼ら自身の社会をそういうリージョナルスタディーの対象にはしてなくて、ご紹介があったように、政治学、経済学、社会学ということで、普遍的な科学の研究、文明社会の研究として研究しているわけですね。アジアはその文明に達していないのでリージョナルスタディーにされてしまっているわけです。

私たちが目指すところは、このアジアに1つの文明圏の可能性を探ることではないかと思います。その出発点は、お互いに異なった文化であり、アジアの多様性であるけれども、まず市場が成立し、それから政治的、文化的な相互連関が深まっていく中から、一体どういうふうな国際社会のあり方がここにあるのか。もう一歩突っ込んで言えば、アジア的な文明がここにあるのかと。そういうことが次の課題となって出てくると思います。それを準備するような形の研究プランというのを提示することが目的だと思いますので、それは当然、「こんな社会もありました」「こんな社会はこんなによそと違います」という、リージョナル・スタディーの枠には収まらないはずであるというふうに思いますので、「そういうことを目指しませんか」というふうに、まず言いたいと思います。

次に、3つぐらいの可能性があると思うんですが、静岡県のほうが、どういう形で学術研究をサポートしてくださるのか。1つの可能性としては、研究を補助する。これは研究費を提供するとか、いろんな方法があると思いますが、静岡県がサポートしなければ不可能であるような研究を支持してくださるという可能性ではないかと思います。ここで議論すべきは、「こんな研究はやる値打ちがある」「こんな研究は今までやられていないけれども、やったら面白いのではないか」ということをいろいろ議論してはいかがか。それを提案したいと思います。

2番目の可能性は、フォーラムでありまして、1年に1回フォーラムがあって、ここでそういう機会でもなければ集まれない、日本ないし世界中の学者が、アジアを1つのテーマにして集まる。その場合に、どういうことをテーマにして、どういうふうに集まったらよいのであろうか。これが2番目の議論であろうと思います。

3番目は、その成果をどのように形にしていくかというアウトプットの方式であり、出版もあり得るでしょうし、これは当然英語でないといけないような気が私はしていますが。それから電子メディアに乗せていくという方法もあります。静岡県民に、日本人に、そして世界の人々に、どういうふうな戦略で情報を還元していくか。これにもプランがあってしかるべきだと思います。

とりあえず、こんな3点を、どういう順序でもいいのですけれど、議論していったらいかがかというのが提案です。

渡辺： ありがとうございました。

ほかの先生方、これに関連しまして、ご意見のある先生は自由にご発言いただきたいと思います。いかがですか。

園田： その点に関してなんですが、先ほども私、視点の重要さみたいな話をしたと思うんですが、もう1つ私の知っている大変面白い一これ自体はアジアに関する話ではないんですが、面白いケースをご紹介したいと思います。北海道大学にスラブ研というのがございまして、ポーランドとか中欧、東欧の研究をなさっている方が多くおられます。ある方が、ポーランドの研究者を北海道のどこかの農協に連れていって日本の調査をしてもらった。本当ですと、スラブ研の人たちは、当然スラブの社会を知りたい。しかし彼らがやったことは何かというと、ブレイン・ストーミングの意味も半分込めてなんですが、ポーランド人に日本の農村を見てもらった。そうしたときに出てきた言葉が、すごくショッキングというか、大変面白かった。それは何かといったら、「これこそポーランドの望んでいた社会主義だ。ポーランドの望んでいた社会主義が日本の農協の中にあった」というんですね(笑)。これが何を意味しているかというと、結局日本自身が全く気づいていないある種の構造が、彼らによって、これを「構造の発見」と言うべきかどうかわからないんですが、ある視点をずらすことによって、すごくよくわかってしまったということなんだと思います。あるいは逆にあることが隠されてしまうということもあるように思うんです。

先ほどちょっと、昼食会のときにも幾つかお話が出ましたけれども、例えば全然違う地域の人がある地域のことを語る。それは、逆に無知だから語れる、あるいは問いにすることができる。それに答えられるか答えられないかというのは大変難しいんですが、そういう問いは、先ほどの話の流れの中で言うと、エッセンシャリズムに陥らない問いの立て方だと思います。いわばぎりぎりの選択として、どこか違う地域をずらしてみる。あるいは変数をずらしてみることによってどういう研究ができるのかということを、僕はもっともっと考えていく必要があろうと思うんです。

例えば、先ほど私はスロバキアというふうに申し上げましたが、べつに僕が体力、知力等があり余って、やりたくてやったのではなくて、実は私の勤めている中央大学の文学部の社会学研究室の中に東欧のことをやっておられる方がいて、その先生が言うには、「外国で調査のできる人が足りないから、おまえやってみろよ」と。私は本当はやりたくないという気持ちもあるんですが、しかしやってみると実に一私はちょっとマゾ気があるのかもしれませんが一痛めつけられると、それなりにその痛みも味わいがあるといいますか、「なるほど、こうか」ということもわかったりする。それは、ある仕掛けといいますか、もしかしたらこういうフォーラムという制度があるからそういうことをやらざるを得ないという部分なのかもしれませんが、しかし仕掛けを設けることによって、もしかしたら多分複数形で語らざるを得ないようなアジア的価値の、ある部分に肉薄するような問題の立て方というのができるんじゃないかなという気がしてならないのです。

もう1つだけ例を挙げますと、これは多分前回のプレフォーラムの際にも申し上げたと思うんですが、私どもが1991年から1993年にかけまして、5カ国、合計46社の日系企業で働く1万人強の従業員に対しましてアンケート調査をやってきました。こちらにも多分国際比較調査をなさった経験をお持ちの方がお集まりだと思うんですが、しかし、我々が調査をする前に、「この国はこうだろう」とか、あるいは「この階層はこうだろう」とか、いろいろな前提を立てるんですが、しかし出てきた結果というのは、例えば国ごとの違いを説明するということをやったとしても、実に大変難しいことがわかります。個々の一まさに橋爪先生が「ゾーン・ディフェンス」という大変うまい表現をなさいましたが一個々のゾーンについて大変よくヒットするんです。ある地域に来たら絶対にうまくディフェンスができるんですが、実はボールというのは、領域と領域の間の非常にあやふやな、これは私のゾーンなのか私のゾーンじゃないかわからないところに来てしまう。しかも、そういうところに来たときが実に問題として大変重要な問いとなるというのがたくさんあるんですね。

例えば、東南アジアにおける二者関係、パトロン・クライアント関係というのがしばしば議論されますが、しかし、それが出てくるシチュエーションというのは、大体農村、あるいはインフォーマル・セクターの中におけるシチュエーションなんです。そうではなくて、近代的な官僚制がいわば覆っているように見える組織の中で、どういうふうにそれが機能し得るかという問いは、多分従来の研究の中からはあまり出てこない。同時に、国際経営ということをなさっている方々からすると、地域研究に相当踏み込む話ですから、そこまでは多分エネルギーがない。となると、そのゾーンは誰かが守られなければいけないのかもしれないけれど、逆に誰もやらなくてもいい。でも何か知りたい。しかも、そこをあるゾーンにすることによって多分新しい領域ができるかもしれない。

多分、ディシプリンとディシプリン、あるいはディシプリンと地域、あるいは地域と地域という幾つかのコンビネーションの中で、視点をずらすことによってでき上がることというのは、僕はあるように思うんです。ですからそれは、多分に主催者側のほうのセンスなり、あるいはフレームワークに依拠する部分があると思うんです

が、そういうフレームをうまい形でオーガナイズすることによって、フォーラムの中の発言なり、あるいは単純な疑問が、1年後、あるいは数年後に何らかの形で解決する。あるいは、解決したように見えて、実はこのことが解決できなかったということに気づいていくというような、ある種の、難しい言い方をすると弁証法的な発展というのが、このフォーラムの中で出てくるような仕掛けというのが望ましいのではないか。

だから何をすればいいのかというのは、個々にはあるんですが、それを総体として表現するのは大変難しいんですが、今申し上げたような、ある種の視点ずらしができるようなフォーラムができ上がっていくと、僕はその中から、それがディシプリンにうまい形で反映した、先ほどの橋爪先生の言い方をすると、「要するに文明社会じゃないから地域研究なのだ」というようなものを十分に飛び越えるような研究も出てくるでしょうし、その延長にある種の認識ができ上がってくるのではないかなという気がいたします。ちょっと抽象的な話になりました。

渡辺： 十分具体性があったと思いますし、面白かったですけれども、ほかの先生方で何かありませんでしょうか。今の話にかかわって。いちいち合いの手を私が入れる必要もないんですが、いかがでしょうか。

足羽： 昼食会のときに一生懸命言ったので、同じことになるかもしれませんけれども、園田先生のおっしゃる前の時点の話だったんですが、具体的に言ってしまえば、ジョン・リーさんがおっしゃったような、オキシデンタリズム、オリエンタリズムという枠を外さなければいけないというのは十分わかっているんですよね。また、社会科学をやってきた者が、西洋の社会科学の枠組みでできてきた言葉で、もはやアジアを語ることはできない。西洋すら語ることはできないというのはよくわかってきている。例えばネイション・ステーツの議論にしても、例えばデモクラシーにしても、「アジア型デモクラシーがあるのかないのか」とか、「ネイション・ステーツはアジアで成立するのかしないのか」という議論をしても、かなり不毛に近いと。それをしている先には、「ではネイション・ステーツという概念は何なんだろうか」「民主主義って何なんだろうか」という、etymology的に歴史を掘り起こしていくようなことをし始めていたうちには、もうある国、たとえば北朝鮮がなくなっていたりとか、いろいろ変化が生じてくるといったような状況で、そういったこともまず1つありますよね。

ただ、私が一番最初に言ったように、私たちがどの言葉でしゃべったらいいのか。一体何を、だれの視点で見て、だれに向けて話しているのかというところは、やはり今の問題として、いつも気にしなくてはいけないことだと思います。そうなると、社会科学の言葉にも100%信頼が置けない。常にオキシデンタリズム、オリエンタリズムのことも意識していかなければいけない。しかもエッセンシャリズムに陥らないような地域研究と比較研究というのが求められている。しかも英語を話す、その国のintellectualsの言葉だけのインタビューではだめだと。かといって、農村に行って農村で集めたきたデータ、例えばあるところで2年間暮らしたところで集めてきたデータだけで何が言えるかというと、それもかなり上の議論と結びつけなければ話せない。現在は、そういうような状況にあると思うんですよね。しかも、社会学の中では、そういうところにかなり気づいて、そこをブレイク・スルーしようとしている方が何人か出てきているんじゃないのかなと期待していますけれども、そういうような感じで、もしそうした方がいるとすれば、それではこのフォーラムではどうしたらいいのかということになると思います。

その一つ一つのことに答えを見つけることはできないけれども、1つの方法としては、実際にそれぞれが地域を持っているわけですから、地域を持っていない方々も、西洋の社会科学の言葉のjargon（専門用語）の上での、これまでのディシプリンのトレーニングの枠組みというのはあるわけですから、それを持ち込んだまま、「視点をずらす」とおっしゃったように、全く違う地域、例えばこれまでの比較研究で、行われてこなかったような地域について、時期を区切って集中的に話していく。「全くそこのことを知らないんですが」という前置きをつける必要は全くなくて、自分の関心。ジェンダーであるとか、社会構造であるとか、文化変容であるとか、そういったこれまでの関心と、1つの地域、あるいは2つ以上の地域の知識を持ったまま、全く新しい目である地域を見てみる。それについて考えていく。トレーニングにもなりますし、jargonを外した上で何が語れるのかという、学者としても刺激があるし、jargonを外したぶんだけ聞いている方にとってはわかりやすくなるんじゃないかというようなところもあるのかなと思ってみたりしています。

リー： 自分のことを言うようになりますけれど、大学院に入って、2年コースを終わって、どこかほかのところで勉強しようと思ったんですね。初めはドイツとかフランスに行こうと思ったけれど、西洋をベースにする社会科学には問題があるんじゃないかと思って、それだったら東南アジアなり日本でも行こうかなと思って日本に来たんですけれど、なぜ日本に来たかというと、1つの理由は、「大塚久雄という男がいて、面白いから読んでみろ」と言われたんですよね。それで読んで、これはなかなか面白いなと思って、「こういう人がいるんだったら、日本の社会学で勉強すれば、もっと面白い視点を持った人がいるんじゃないか」と思って東大に来たんですけれど、いなかった（笑）。

またちょっとそれますけれど、丸山眞男さんの「日本の思想」という本がありますよね。彼は日本の知識に対して、すごい批判をするわけですよね。「タコ壺型」とか「専門ばか」とか言っているんですけれど、これは実はアメリカの学者に当てはまることなんですよね。アメリカの学者なんか、本当に自分の専門以外何も知らない。社会学をやっても、ウェーバーを読んだかどうかもわからないような人の集まりのような感じだから。そういう意味で、日本の学者のほうが、やっぱり新しいパラダイムの提供をする可能性があるんじゃないかとも思うんですよね。さっき言ったのは、べつにほめ言葉で言ったのではなくて、かえって専門化されてないから新しいものが見えるんじゃないかと思うんですよね。

だから、また大塚さんの話になっちゃうけれど、ポスト工業化なんて、80年代に入って、西欧経済史家の中ですごく話題になったんですけれど、大塚さんは資料もないのにそういう一応概念を提唱して、日本語で書いてあるからだれも読まなくて50年ぐらい埋もれていたんだけれど、そういうのができてもいいんじゃないかと思います。どうも抽象的な話ですが。

橋爪： エリア・スタディーの人の、エリアを越えるというのは私は大賛成なんですね。越えられないとなると私は発言権ゼロになっちゃうからという理由もあるんですけれど（笑）、しばしば、例えば「アジアのことを考えましょう」とかというので、各エリアの専門家という人が集まってきて相談したり何かするというところを見ると、非常に私は悲惨な気がするんですが、みんな自分の調査対象がいかに独特で、「アジアというけれども、私のところは特別です」ということを言うのに汲々としていて、結論がないんですね。アジアの「ア」の字も見えてこないという経験が多々あります。それはもうさんざん言われてわかったので、その上に、彼らがさんざん調査した知識をどういうふうに二次加工して人々に訴えかけていくんだという、そういう戦略を持ってなければ、ちょっと学者として困るんですが、そういうことをぜひやりたい。足羽さんがおっしゃったのは、そういうふうな意味じゃないかなと思うんですが。

私はもともと何のエリアも持っていない人間なので、実はもう既に勝手に自分1人でそういう無責任なことをいろいろやっていて、先ほど来非難されているやり方ですが、朝鮮語もわからないのに、北朝鮮に1週間行っただけで本を書こうとしている悪いやつなんです（笑）。でもそれは、北朝鮮の専門家という人たちが書いた本は、さんざん読みました。数がそんなにないからすぐ読めるんですけれど。ご承知のように、「金正日が安定的に政権を継承していて国家首席にならないのは、喪に服しているんだ」という説が、大体3分の2ぐらいの日本の研究者がそう言っていたわけですね。残りの現代コリア研究所の人たちは、「複雑な内部闘争があって云々」ということを言っていたんですが、私は、読んでいて直感的に後者のほうが正しいと思っていて、その線で書き進めることにしていたところ、午前中にも言いました、黄書記が亡命していろんなことがわかってきたわけなんですけれど、専門家というのは、そのようにいい加減なものであって（笑）、結構あてにならないんだけれど、そういうことを言ってくれる外部の人というのがいたほうが一外部の人が正しいとは限りませんけれど、研究は健全になるんじゃないかと思うので、そういうことをぜひやりたいというふうに思っているわけです。

渡辺： ありがとうございます。全く同感です。

ほかの先生方、いかがでしょうか。瀬地山さん、どうですか。

瀬地山： 地域研究をつき合わせるというのは本当に大賛成で、多分そのほうが生産性が高いと思うんですけれど、一度韓国と台湾ですり合わせた経験でいうと、結構大変な話で、相当労力を必要とするのと、やる側としては相当な勉強量が必要になって、時間と、ある程度のマンパワーとお金というのがかかると。それを本腰になって、ちゃんと一定の組織がつくられて、1年間の中で何回かワークショップを持ってきちんと進めていくというふうにしないと、何か非常にいい加減なものになりやすいパターンでもあるので、そこのサポート体制みたいなものがうまくできればいいと思うんですけれどね。

渡辺： どなたでも結構なんですが、いかがでしょうか。

先ほど橋爪先生の言われたことと同じようなことを言っていることになるんですけれども、私はエリアも持ちませんし、あまりアジア研究もやっていない。そういう人間がこういうところに座っているのは大変僭越でもあるんですけれど、もともと、日本研究というか、世界の中の日本型システムというのを、このところ2～3年、そういうプロジェクトにかかわってやってきている中で考えますと、日本研究というのを世界の中に持っていったときに、「日本は特殊だ、特殊だ」というふうに、先ほどのジョン・リーさんの午前中の話にも出てきましたように、日本特殊論というのがたくさんありますと、一昔前一と言うと言い過ぎですけれど、1、2世代上の日本の研究者というのは、「日本は西欧と同じだ、同じだ」と、出ていって言う。「特殊だと言われるけれど、実は特殊じゃなくて西洋と同じだ。違わない」ということを、みんなわざわざ英語に翻訳した論文を持ってきて、海外の国際会議へ来て言うんだけれども、「同じだったら何もやる必要がないんだけれど、見るからに全然違うのに、なぜ同じだと言うのだ」というのがアメリカの研究者が言っていたせりふで、それはあると思うんですね。多分、昔の日本の研究者が同じだと言うのは、「おまえたちは要するに後進国だ」というふうに突き放されることに対する危惧として、「我々だって同じだ」というような、多分そういう文脈であったんだろうというふうに思うんですけれども、今度は先ほど橋爪先生がおっしゃったように、エリア・スタディーの中から、「特殊だ、特殊だ」という、アジア研究だけが声高になってきたときには、やっぱりよくわからないので、私のようなエリア・スディーもやらない人間がアジアのことを考えてはいけないような気が片方でしながらも、何か、もう少し一般的な枠組みでアジアを見る人間があってもいいんじゃないかというふうに思っているわけです。

そういう意味では、きょうの昼から先ほどに至る、エリア・スタディーというようなものはあるにしても、もう少し、二次加工でもいいんですが、加工して、一般的な枠組みで全体を見ていけるように考える。そのときの方法として、先ほど園田先生がおしゃったような視点く

ずしという方法もあると思います。私の大学にもルーマニアを専門にしている先生がおりまして、「ルーマニアというのはどういう国ですか」というふうに、私が全く無知な質問の仕方をしたら、「そうですね。日本の一昔前の、30年代の田舎のような国ですね」というような言い方をされたんですけれど、それはいろんな意味があって、ルーマニアの人に悪いという部分もあるかもしれませんけれども、地方の農村を中心にしたコミュニティーのあり方が非常に似ているだとか、そういうことを意味していたように思います。それは、日本人である彼がルーマニアの農村地域に行かなければそういう発見はなかったという言い方もあると思いますので、先ほどの、農協を見て日本の社会主義に気づいた偉いポーランド人のような形で、何かクロスオーバーしていくということも面白いと思います。

これをもう少し具体化して、アジア研究の中で、例えば「こういうエリアに対して、こういう枠組みを持った人が行って、こういうことをしたらいいんじゃないか」とか、もうちょっと突っ込んでというか、その方向に特化しちゃうというのもいいことかどうかわかりませんが、ちょっと今話の先が滞ったので、今の話をもう1つ先へ具体化するというような、何か提案はございませんでしょうか。例えば「何人をどこへ連れていく」とか、何でもいいんですが。「○○研究者をどこどこへ連れていく」とか、そういうことですね。

橋爪： 橋爪ですが、私は、午前中に申しましたように、北朝鮮、台湾、中国の順番で急いで研究したほうがいいと思っているんですが(笑)、そのやり方は、北朝鮮の専門家を集めてみんなで相談するというのではなくて、「北朝鮮の専門家じゃない人が何を知りたいか」ということをまず出して、それについて専門家やそうじゃない人がどれだけ答えを出せるかという、総合戦略的なアプローチになるだろうと思います。台湾や中国本土に関しても、恐らくエリア・スタディーの範囲では、予測がつかないことがいっぱい起こるというふうに思いますので。そういうことなんですね。

同じことで、もっと別なことを幾つか考えてみれば、これは歴史研究になるけれど、大東亜共栄圏の研究。日本人のアジアイメージの原点はそこにあり、そして、これは封印された問題であるのですけれど、「大東亜共栄圏というのは何だったのか」ということを、「本当にネガティブな要素しかなかったのか」ということを洗い出してみるというのも、アジアの学者もおいでくださったほうがいいと思いますが。

あと、今回アジアというと、東アジア、東南アジアまでなんですけれど、逆にインドということを中心に据えて、アジアを専門にしているけれどもインドの専門家ではないという人にインドのデータを紹介し、インドがほかのアジア地域とどう違うかというふうなことを認識してもらうとかね。インドは非常に経済成長しておりますので、産業界のサポートもあるだろうと思いますし。

もう1つ、さらに言えば、ムスリムの問題で、フィリピン、インドネシア、それから中国の中東部にもムスリムの人々がたくさんおりますが、そういう、私たちになじみのないアジアの要素とか、いろんなことがあると思うんですが、そういうことをとりあえず、瀬地山さんがおっしゃったように、セッティングは難しいんですが、逆にすごく親切な専門家の人が、少なくとも1人か2人とは言いませんが、1人いれば、あとの7～8人を巻き込めば、こういう研究はできるので、可能性がある。そういう人を見つけられれば、そういうのから先にやればいいんじゃないかと思います。

瀬地山： 私も北朝鮮はぜひやってみたいとは思っています。ただ、北朝鮮は一番そういうのをやるのが難しいところで、資料的に見ても、出ているものが、日本語以外ですと、アメリカの資料が若干ありますけれど、あとは韓国の統一委員関係で、韓国語で書かれているのがほとんどで、それから現地に行けないというか、行っても見せてくれるところしか見られない。見たいところは見られなくて、見られるようになったときには多分見たいものはなくなっているだろうという究極のジレンマもあって、なかなか難しいところです。だから、やるとすると、例えば中朝国境の側とか、それから露朝国境の側から、朝鮮に関する、共和国に関するデータを集めるとか、何かそういうことを多分しなければいけないと思います。そうでないと、あとは、ほとんどもう韓国の統一委員なんかでやっているようなものの焼き直しになってしまうとかね。焼き直しといっても、視点が違えば同じものを見ても多分幾つか面白い点が出てきますから、それはそれでよいのですが、北朝鮮の場合には、多分現実的にはそこが一番大きなポイント、具体化をしていくときには一番大きなポイントになるかなというふうに思っています。

それから、南アジアに広げていくというご提案に関して申し上げると、個人的には、まずこのフォーラムのパンフレットの表紙の図。さっきの昼食会のときにはたと気がついたんですが、このフォーラムの図は、表紙をごらんになっていただきたいんですが、こういうやつですね。これは橋爪さんがおっしゃっいましたけれど、まさに大東亜共栄圏の図でして、大体日本が攻めていこうとしたというか、日本が一緒に暮らそうとしたと言ってもいいんですけれど、そういう図とちょうど重なっているわけですね。

先ほど私が申し上げたことの延長で言うと、東アジアというのは、多分そういう意味で、比較の軸みたいなものがわりとできやすい。それと、交流論としても、一番最初に出てくる交流論というのは多分東南アジアで、東南アジアを介して、南アジアとの比較が可能になる。ムスリムの問題も、東南アジアを介していろいろ出てくるとか、そういうふうにできるのではないかというふうに私は考えています。

渡辺： 園田先生、この文脈で、台湾、中国はいかがでしょうか、今の話で。先ほど、なくならないうちにやる順番で、北朝鮮、台湾、中国という順番が橋爪先生から出されたわけで、今北朝鮮絡みの話がまた出たわけですけれど、次に台湾とか中国というところを回るんですが、その辺でいかがでしょうか。

園田： そうすると、私がしゃべろうとした話が、多分それによると崩れてしまう可能性があるので、若干。

渡辺： それでは何でも。

園田： 私も引っ張りながらちょっと話したいんですが、これは多分私自身の個人的な関心による部分が大きいんだと思いますが、どういう具体的なagenda (論題) があり得るかというのは、多分相当バラエティーがあるでしょうし、それを1つにまとめるというのは逆に大変難しいんだと思いますが、私が最近個人的に関心を持っているのは、ジョン・リーさんがさっきおっしゃったように、「外にある日本」という話でありまして、それは日系企業の中でどういうような話が出ているか。ちょうど、今の我々と同時並行的に行われているフォーラムで、「アジアに出て行った合弁企業がどうだ」という話でございます。これもさっき、「ゲリラ式の比較」なんて、私がゲリラだから、みずからを自画自賛しているようなところもあるんですが、実は東南アジアも含めた日系企業の、特に日本人の人たちのインタビューなんかをずっと続けていますと、いろいろなことが、ある部分でわかったりわからなかったりする。先ほどもちょっと申し上げましたけれど、東南アジアの中では、パトロン・クライアント関係というのは大変重要だ。あるいは、先ほどの私の話の中でも、中国の中で、あるいは台湾で、「関係」という、「関係」というのは極めて重要だという話をしました。しかしそれは、ある局面の中においては極めて重要なんだけれど、ある局面の中においては、それは企業行動の中において、首尾よくといいますか、うまいぐあいに抑圧されるといいますか、少なくともそれが制度の中で出てこないような形で組織がつくられるということがあります。それは、100%日本企業なのか、あるいはパートナーがいるかによっても随分あらわれ方が違うんですが、例えば同じ企業の中で、それぞれの地域でどういうようなトラブルが出ているかというのは、これはまだ私も完全な形で把握してないんですが、比較的地域の色というのはやっぱり出てくる。

例えばこれは、私はパトロン・クライアントと中国の関係という問題の違いとして言えるのかなと、今漠然と思っているのはこういうことなんですけれども、例えば、これはマレーシアで、「中国系とマレー系で見られる違いだ」というような形で、ある人がした話をまとめてみるとこんな形で出てくるんですが、どういうことかといいますと、中国系の人たちをマネージしている場合に何が問題になるかというと、何かトラブルが起こったときに、すぐ工場長の一番上のところにクレームが行くんだそうです。つまり、工場長というのは、全員の人間の情報をうまい形でマネージしていかなければいけない。つまり、そういう形で組織がつくられると。ところがマレー人の場合は、ボスのボスは必ずしもみずからにとってボスではないので、末端の従業員の情報までトップのマネージャーが全部知っているなんてことは、そもそもあり得ないし、逆にそれをやろうとすると、いわば直接の上司のメンツがつぶれた形になってしまう。どうもそういうような違いも出てきそうだと。ただそれは、先ほど言ったパトロン・クライアントなり、中国的、あるいは台湾的な関係と全く同じ形で出てくるかというと、やっぱりそこに幾つかのフィルターがあるだろうと。

このように、従来地域研究―先ほどのオリエンタリズムの話もそうですが、結局、ある本質的なところを見ていこうとする研究戦略というのは、どうしてもエッセンシャリズムが出やすい。例えば農村地域だという部分だったと思うんですが、それが、まさにある種のインターフェースを持ちながら、それがいろいろな形で屈折して、プリズムを通りながら出てくるデータをどういうふうに見ていくか。それは、まず一時的には、私が今個人的にやっているのは、日本人の駐在員の人たちがどういうふうにそれを認知しているのかという認知の枠組みです。今やっていますが。それがだんだん発展して、彼らが認知している枠組みを従業員の人たちがどう認知しているのかとか、そういうふうにだんだん広げていくと、これは結構面白い研究になるのではないかというふうに思っています。

それで、中国と台湾がどうなるかという話なんですが、どういうふうに申し上げたらいいでしょうか。これはいつも思うんですが、僕は自分で相当アップアップしながら研究しているつもりなんですが、橋爪先生とお会いすると、「あなた、今の3倍働かなければいけない」というようなプレッシャーを絶えず感じてしまいます。どういうことかといいますと、さっき申し上げたように、私の友人で、台湾の中央研究員のマイケル・シャオさんという方がおられますが、彼らが1992年になさった「アジアNIESの中間層の調査」なんていうのがございました。さっきちょっと立ち話をしましたら、「まだ比較研究はできていない」というふうにおっしゃっていました。それは、先ほどの瀬地山さんの話とすごく似通ってくるんだと思いますが、やっぱり比較研究は、言うのは簡単だけれど、なかなか難しい。当人自身もどういうふうに解釈していいのか、非常につらそうだといいますか。つまりそれは、個々の研究の、まず最初のモチベーションというのは、先ほどのウエスタン・インパクトというのがどうしてもあって、そこからどうにかしてローカリゼーションしなければいけないという思いがある。個々の人たちが何となくローカライズしようとしている。それは、韓国の中における文化資本のあり方がどうだとか、あるいは台湾の中におけるmultiethnicityの問題。ハッカ (客家) と外省人、内省人がどうなっているか。本省人がどうなっているか。こういうような話にどうしても行きがちな部分が1つあるので、日本の研究者として、先ほどの地域を越えた問題の設定というのが、少なくとも我々の側で認知していても、彼らの側がそれにレスポンスしてくれない―というのはおかしいですね。「レスポンスしなければいけないと思っているけれど、どういうふうに

とっかかっていいのかわからない」という部分がある。したがって、そこまで我々が落ちていこうとすると大変なエネルギーがいるということです。

先ほどの日系企業の話もそうですが、問われるべき、あるいは関心を持つ問いというのはすごくたくさんあるんだと思います。列挙せよといったらいろいろ列挙できるんですが、ただ、やっぱりフィジビリティー（実行可能性）というのはちゃんとあって、そのヒエラルキーというのを見極めながら、どのあたりで、そういうアジェンダを出していくか。ですから、今私が申し上げた、1つは日系企業、もう1つは中間層といいますか、それはやっぱり、先ほど足羽さんのコンシューマーリズムと絡むんですが、それは大変面白い切り口になるかなというふうに思っています。

渡辺： どなたでも、おっしゃってください。

リー： これはまた具体的な話になっちゃうんですけれど、シャオさんの名前が出てきたので。彼の研究に私は携わってないんですけれど、なぜ進行しないかというと、そういう問題もあるけれど、本音はただみんな怠慢だからということになるんですよね。というのは、みんな忙しい人を呼んで一緒にやるわけですよね。ところが、みんな忙しいからできない。4年経っても調査票もつくっていないという、そういう感じになっちゃうんですよね。

具体的な研究対象ですけれど、普通アメリカなんかで研究をやろうとすると、財団に延々とグラント・アプリケーション（助成金応募書類）なんか書いて、2年後やっとお金をもらって何とかやれるというような状態ですから、それにくらべると、ここでは自由にやれるのですから、もっとマクロなことをやったらいいんじゃないかと思うんですよね。つまり、何でも屋さんが集まっているような感じだから、もっと枠組みづくりとか、新しい視点のつくり方とか、そういうふうにやったほうがいいんじゃないですか。

つまり、個別研究なんかいろんなところでやっているわけだから、かえってそういう人たちがやりそうもないようなことを。だから、さっき橋爪さんがおっしゃっていましたけれど、例えば大東亜共栄圏の歴史的研究よりは、現在における大東亜共栄圏というか、そういう感じで枠組みを取って、経済なり文化なり、日本の浸透ですか、侵入ですか。そういうことをやってもいいんじゃないでしょうか。

橋爪： ある程度、大ざっぱと言うと語弊がありますが、エリア・スタディーからすれば大ざっぱすぎて業績にならないようなことだけれど、しかしやる値打ちのあることというのはあって、フォーラムというのは、ペーパーを書くためのものとは限定できないので、そういう大雑把なものでも、社会的に存在理由があることだったらやっていいと思うんですね。

私が台湾と言ったのは、台湾社会について細かく研究しようということではなくて、とりあえず日本人が知りたいのは「台湾は独立するのかどうか」ということですね。台湾が「独立する」と言った場合に、中国大陸はそれを許容できるのかどうかということなんですね。両方が統一するという可能性は、大陸のほうが変わらない限りあり得ないと。だから独立するに決まっているわけですが、しかし独立するとは言えない状況というのがあって現状に至っているわけです。それでアメリカも日本も台湾を承認していない。けれどもこれだけの密接な関係がある。確かに非常にアンバランスなわけです。この先、どういうふうにこの不自然な関係を切り開いていくか。これがプラクティカルな問題で、それについてどういう障害があるのか、だれがどういう認知図式を持っているのかということを洗い出していって、問題についてシナリオを考える。これが一般国民が台湾に持っていることなんですよ。

だから、エリア・スタディーのさまざまな知見があるけれど、それをどうやってそこまで積み上げていくか。これが緊急な課題である台湾というものの私のイメージなんですね。そういうやり方だったらできるんじゃないでしょうか。

渡辺： そうですね。今橋爪先生が、先ほどというか、午前中の部会から、なくなりそうな順番だか何だか知りませんが、北朝鮮、台湾、中国という3つが出ているので、そこにこだわって話を展開してもらっているわけですけれど、今の話は、まさしく台湾研究とか北朝鮮研究という以前に、このアジアフォーラムそのものが目指しているものというふうに言っても言い過ぎではないんじゃないかなという気がするんです。それはどういうことかというと、アジアだけではなくて、例えば今回関係ないですけれど、例えば中東とか、国際関係を入れると、いろんな分野の先生がいるわけです。中東もいるし、アメリカもいるし、いろいろいるわけですけれど、エリア・スタディーというのは結構やられているわけですよね。それも、いろんな国の言語でやられていて、必ずしも日本人が読みやすくはなっていないわけですけれど、これを、例えば日本人がとか、静岡県民がとか一静岡県民というのはそんなに意識しなくていいかもしれませんが、とりあえずは一般の日本人がわかる形で、これを加工といいますか、こういうものを取りまとめて、「台湾というのはこういうもので、今こういう現実に直面していて、こういう事態に至っているのだ」ということをわかるようなふうに、学術的なエリア・スタディーがそのことに貢献しない形になっているんですよね。一般の人たちが知るのは、何か突撃型ルポライターみたいなので、「行ってきました」「見てきました」という人たちの意見で、これは学術研究と全く切り離されて、こういう人たちがジャーナリズムに登場しているという場合と、それから読んでもほとんど理解できない、大変高邁な学術研究のエリア・スタディーが共存していて接点がないという状態ですから、まさしくこのアジアフォーラムの中で、アジア研究のさまざまに、いろいろなところでばらばらに積み上げられているエリア・スタディーのようなものを、うまく組合せながら、ある何かについての、みんなが理解しやすい情報をつくっていくというんですかね。それが目的でいいんじゃないのかなと今思っております。あまりまとまらない話なんですけれども、非常に素直な感想なんですけれど、ほかの先生方、何かどうぞ。

足羽： ちょっと一言だけなんですが、比較研究をこれまでされてこなかったような地域のもので考えると。1つトレーニングをするということは重要だと思うんですが、そう言いながらも、まとめるときに、「今回は東アジアでいきましょうか」とか、「どこのエリアでいきましょう」という話にまたなってきてしまってもいいのかどうかという疑問があります。

例えば、反対しているわけではなくて、北朝鮮、台湾、中国となった場合に、どの広がりで見るか。その3国か、園田先生がおっしゃったように華僑まで含めた広がりで考えたらいいのか。具体的な地域の設定というんですか。そこら辺もかなり戦略的に考えなくてはいけないというのが1つあるんですが、そうじゃないと同じ穴にまた陥ってしまうということがあると思います。

そうじゃなくて、もう1つは、これは自分で考えていて、なかなかはっきり言えないんですが、例えばパトロン・クライアントの関係の議論というのは、東南アジアではされてきているけれども、そういったものが、ほかの社会、アメリカにはないのか、イギリスにはないのか、アフリカにはないのかというと、あるわけなんですよね。東南アジアを語るときにはそういった言葉を使うのに、東南アジアから一歩外れたバングラデシュについては使わないのはなぜか。考えてみれば全くおかしな話なんですね。だから、そういった枠組みを取った場合に、一体どの言葉をキーの手がかりに持ってこれるかという選択ですね。それを一応、皆さんそれぞれの研究領域とかディシプリンの中で考えていると思うんですが、それでコンシューマーリズムとか何か出てくると思うんですけれど、そこら辺の洗い直しというんですか。「この言葉でいきましょう」というか、これまでの蓄積議論は置いておいて、「今恐らくアジアで進行している現状を語るとすればこの言葉ではないか」と。それを枠組みとして置いて、そのサブカテゴリーのタームというものを探し出していく必要があるんじゃないかと思っているんです。

つまり、ディシプリンの中で考えていくと、それなりの議論があるわけですから、その議論のどこかに乗っけて、自分の新しい調査の報告を持ってきて、論文を書いて、そしてある程度一歩進めたのを最終の章か何かに置いておけば、それでやっていけるわけなんですけれども、それをすると、そのエリアの人が読めばわかるけれども、ほかの人たちが読んでもよくわからない。「どこが面白いのか」というふうになってしまうので、できるだけ普遍的な言葉を持ちそうな、しかもこれまでのいろいろな議論にさらされていないような、さらされているところを払拭しやすいようなものを探していく作業というのは必要じゃないかなと最初に思います。

瀬地山： 何か、違う角度から見たときにぱっと別の側面が見えるというのが、そういうものの一番の面白さで、北朝鮮の話だと、多分ソ連研究をやってきた人とか中国研究の人の観点から北朝鮮を見ると、いろんな違いというのが多分ぱっと見えると思うんですよね。わりと簡単に見える。北朝鮮の専門家が言っている以上のことが、ひょっとしたら、言っているのとは違う角度というのがぱっと出てきたりすると思うんですね。

橋爪先生の2番目におっしゃった台湾というのは、私はちょっとまだ「うーん」と思っているところがあって、統一問題とか独立問題の話なんですが、それを何かそういう意味で、別の角度からぱっと見るというのは、なかなか具体的に考えるとちょっと難しいなと思って、どういうアイディアがあるかなと、ちょっと今思っているんですけれどね。

渡辺： たまたま今出されている北朝鮮にしても、台湾にしても、中国はちょっと別にしても、国境というのがすごく意味のある国として出ているわけですよね。きょう午前中の話でも出たと思いますし、それからお昼にもちょっとそういう話が出たと思うんですけれど、このネイション・ステーツというものの領域性というか、囲い込まれている部分というものの意味ですね。社会システムとして見たときに、そこの部分があまりほかから独立していないような形に、境界がかなりあいまいになってきていて、例えばアジア、特に東南アジアがそうなのかなというふうに思うんですが。大陸のほうだと中国というのがドーンとありますからね。そうした意味で、東アジアのほうは割合はっきりしているかもしれませんけれど、東南アジアなんかのほうから南アジアのほうに行きますと、むしろ国境というような、民族国家の境界線によってその国を分けるというよりは、もっと、例えば宗教だとか、言語圏だとか、文化圏だとか、昔の植民地時代の宗主国の国のタイプとか、いろんなものによって分節化するというか、分け方が大分違ってきているような気がするわけですけれど、その辺を考えるときにどういうふうに組み込んだらいいのか。それこそエリア・スタディーみたいなこともやったことがないわけで、私はその辺をどういうふうに考えていいのか、ちょっとわからないでいるんですね。

ちょっと話の文脈がずれるかもしれませんが、たまたま北朝鮮とか台湾というのは、本当に国境問題だとかあるわけですから、なくならない間はね（笑）。だから、今度はなくなるとかなくならないとかということにもかかわるわけですけれど、その辺はどうなんでしょうか。東南アジアに限らず、アジアを研究する場合の、国境というんですか。あるいは民族国家の問題。グローバリゼーションだ、オリエンタリズムだという話で、先ほどから話が出ていますけれども、その辺はどうなんでしょうか。ちょっと話がずれるような格好になって申しわけないんだけれど。どなたでも結構ですけれど、だれかちょっと返事をしてほしいんですが。

リー： 僕特有の考え方だと思うんですけれど、アジア学というのは、本当はアジアがなくなりつつあるから成立するようなものだと思っているんですね。よく言われることですけれど、「社会学というのはノスタルジアの科

学だ」というわけですね。つまり、共同体がなくなっているから社会学みたいな学問が成立して、日本学もそうですけれど、韓国もそうですよね。みんな何を見つめているかというと、みんななくなりつつあることを見つめているわけですね。それを本質と思って何だかんだ言うわけですけれど、実際日本に住んでいてもそうですけれど、韓国もそうですけれど、実態は変わりつつあるわけですよね。何が基本かというと、さっき足羽さんがおっしゃったような、消費主義とか、資本主義とか、西洋文明とか、そういう感じなんですね。だから台湾なんかに行っても、「ウルトラマン」みたいな日本文化が侵入したりして、タイに行ったら漫画ばかり出てくるとか、何か、日本にいたら信じられないような状態が生じているわけです。しかし、日本から来る研究者というのは、そういうつまらないものは研究しなくて、もっとよりエキゾチックなもの、つまり本質であるべきものを探すわけですよね。そういうずれもあるから、かえってそういうこともわきまえて研究したほうがいいんじゃないんですか。

足羽： 両方ありますよね。研究者が本質的なものを探すというのもあるし、「『ウルトラマン』に侵されている」と考えている、そこの国の人たちが自分たちの本質的なものを探すというのがありますよね。むしろ、研究者のほうの本質的なものを探すというのは、こちらの戒めとして置いておけばいいんですが、問題は、その国の中に出てくるエッセンシャリズム。「ノーと言える中国」であるとか、あるいはスリランカのシンハラの仏教中心主義であるとか、いろいろな形で出てくる、その国のアジアの価値。Asian valueもそうじゃないかなと私は疑っているんですが、そういった中に出てくる本質主義。そういったものの絡みの中で、国家権力の及ぶ範囲としての国境というところはどうしても外せないんですよね。よく移民の問題とか、それこそ私が今いる大学に専門家がいるので、その人たちと話すときには、結局いろいろな移民の問題、シチズンシップの問題とかを全部やって、外せないのは国境であると。結局は、国の法治力が及ぶ範囲としての国境があって、人が移動しても何があっても、その国が存在するのには国境があるんだというような話に最後はなってくるんですが、それとはまた別の種類の線引きというのを、その国の中のエッセンシャリストがつくってくると。そこら辺の問題が、やはりアジアに共通して出てきているんじゃないかと思うんですよね。

その極端な逆の例として、最近何人かのアジアの人たちと話すと、シビル・ソサエティーの議論がすごく盛んで、「ネイション・ステーツがだめだったら今度は市民社会論だ」という形で話して、ちょうどそこら辺にNGOが出てくると、「ちょうど現象としても合っているんじゃないか」というような、あちらこちらでデモクラシーが出てくるという形になるんですが、一体それでどこまで語れて、語れないのか。またネイション・ステーツがだめで、今度はシビル・ソサエティーに移って、それでまたしばらく、ここ10年ぐらいはシビル・インダストリーというのがあって、たくさんペーパーが出るのかもしれませんけれども、そうではない部分ですよね。そういう風に、このコンセプトを持ってきた説明でいくか。これはだめだからやめた。あるいは、10年間ぐらいやって、「よかった。その次はこのコンセプトだ」というようなやり方は、もういい加減やめてもいいんじゃないかと思っているんですよね。ただ、こちらがやめても、そこに住んでいるインテレクチャルズがやっている限りはなくならない。

そういった、二重になっている問題が、常にアジアを見ていくときにはある。では、アメリカを見ていくときには、そういうところはないかというと、そうではないんですが、ある程度の言葉の共通性があり、現実の認識もある程度わかっている。アジアを見るときには、中から出てくる、intellectualsが持ち上げてくるエッセンシャリズムが常にある。それと「ローカリゼーション」とおっしゃった場合の、そのローカライズされるものは何なのかというところの問題と重なってくるんじゃないかなと思うんですけれどね。

渡辺： ちょっと話を途切らせるようで申し訳ないのですけど、きょうの午後の分科会のやり方としては、「今後何をするかを詰めようぜ」という話で始まったわけですね。そこへもう１回収斂型に話を持っていく前に、午前中を含めまして、どなたかフロアーにいる方に、もし何か全体の流れとか、聞いていて、「けしからんことを言っている」とか「いいことを言っている」とか、何でもいいんですが、そういうことも含めまして、ちょっとご意見がありましたら、その辺を少し聞かせてもらって、少しもう一度収斂に向けてやっていったらどうかなというふうに思うんですが。

いらしている皆さんの中で、何かご意見とか、質問でもいいですから、何かありましたら、出していただきたいんですが、いかがでしょうか。

小島： リー先生にお聞きしたいという形でもよろしいんでしょうか。

渡辺： ちょっと、所属でも何でもいいんですが、お教えいただけませんでしょうか。どこのどなたであるか全くわからないので。

小島： 国際交流基金の小島と申します。

今アメリカは、日本もそうですけれど、企業の業績がいま一で、ダウンサイジングが盛んなんですね。アメリカの財団もダウンサイジングをしている。そのために、アメリカのアジア研究所が、以前ほど財政が豊かでないと。そういうような状況において、アメリカでのアジア研究は、冷戦後、財政がどうなっているのか。それと、冷戦後のアメリカのアジア研究はどこに重点を置いているのか。例えば中国により重点を置いているのか、あるいはどこの国の何にアメリカのアジア研究は重点を置いているのか。そういうようなお話を伺いたいんですが。

リー： 確かに財政危機であり、パラダイム転換を行おうとしているんですよね。だから、財団なんかで、「お金をあげるから、何か研究科目を出せ」というわけですね。どういう研究が受けるかというと、やっぱりパラダイム転換の話なんですね。だから、地域研究の枠をどう考え直すとか、地域研究の業績は何だった、国際研究というものはどうなのかとか、いわゆるトランス・ナショナル、グローバル化された時代の国際研究、エリア研究とはどういうものなのかというたぐいの研究が、やっぱり一番焦点が合えていますよね。

アメリカ自体が非常に広い国なので、一般的に何とも言えませんけれども、やっぱり金をくれるところの国の研究が進むということは確かなんですね。最近はNICSの国。例えば韓国とか台湾が財団をつくって、膨大なお金をあげるわけですよね。500万ドル、1,000万ドル単位で某有名大学にお金をあげるものだから、至るところで、特に韓国学、台湾学なんかそうなんですけれど、チェアですね。教授の職をつくったり、あとは奨学金を与えたり、図書館をつくったり、そういう面で非常に繁栄しているわけですね。だから、逆にお金のない国、例えばインド学というのはすごく遅れていて、例えばイリノイ大学なんかでも何人もいたのに、引退しても、だれも代理人を選ばないとか、そういう感じになっていますね。だから、一貫して言えば、繁栄状態に反映されるというか、つまり経済的状態によって繁栄しているから、今日本学は大丈夫、中国も大丈夫、韓国も大丈夫。しかし貧しい国、例えばベトナムとかインドだったら、ほとんどお金はないから、あまり学者も養成していないし職もないと。そういう感じですね。

小島： もう１つ、今の関連で、全体に関係していると思うんですけれど、今のアメリカのパラダイムの変換に対して、評価というのがあるんですけれど、評価というのは、どういうふうに評価されて、「このパラダイムの研究は価値がある」という風に言われるのでしょうか。アメリカではどういうふうに評価されるんでしょうか。

リー： だから、非常に議論のまとになっているわけですよね。古典的なオリエンタリストというのがいまだにたくさんあって、例えば、私の同僚の人類学者なんですけれど、彼は口ぐせで、「私はルース・ベネディクトの『菊と刀』のフットノートになるような業績をやれば、それは一生生きた価値がある」とか何とか、そういうようなことを言うわけですよね。若い世代の人に言わせれば、「ルース・ベネディクトなんて読む必要もない」と言うわけですね。それでは、誰を読むかというと、フーコーを読むとかボードリアールを読んで、それの理論を使って日本を勉強するとか、日本を研究するとか、そういう感じになっているから、話し合いといっても話し合いにならないわけですよね。叫び合いにはなるけれど話し合いにはならない。だから、アメリカ人はだれでも議論が好きと言われますけれど、実際にはそういうことは嫌いだから、叫び合ったらもうだれも話さない。だからゴーストタウンになってしまっているというのかな。だから問題は多いんですよね、そういう意味で。

30年前だったら、みんなアジア学をやっていることで、わいわいにぎやかにやっていたわけだけれど、現在となっては、アメリカの事情もそうなんですけれど、ジェンダーをやっている人はフェミニストで、家父長主義制度の人は嫌だから話もしないとか、私はレズビアン・ゲイ・スタディーをやっているから、つまり「homophobia」というんですけれど、同性愛蔑視主義の人とは話さないとか。あとは「フーコーを読んでなくて何を語れるのか」というような人がいて、アジア学入門コースがあるわけですよね、マスターズのレベルで。イリノイ大学で。教えている人が若い人なんですけれど、なんと15週間あるのに、10週間をフーコーとかそういうものにつぶして、あとの５週間にちょこちょこタイの本を１冊読むとか、そういう感じでやっているわけですよね。だから、アジア学にも本質は失われつつあるという何とも情けない状況です。

小島： どうもありがとうございました。貴重なご意見を。

渡辺： ほかにどなたか。

玉置： 静岡県立大学の玉置と申しますが、本当だったら非常に努力してそちらに加わるべきところを、非協力的で渡辺先生から怒られておりますが、こういうところから言ったほうが気楽なので一歩引かせていただいておりますが、もう既に「どういう研究をやろうか」という段階になったときにフロアに意見を求められると、フロアとしても好きなことが言えないという気がするんですが一べつに渡辺先生を非難しているわけではありますが一いや、ありませんが（笑）。

ちょっと感想的なことと関係あるようなことを言わせていただきますと、先ほど足羽さんがちょっと言われたような、土着のエッセンシャリズムというのは、シンハラ文化だとかタイ文化だとか、さまざまなレベルであるわけですけれども、もともと、例えばこのフォーラムを企画した、発案した段階に立ち戻ってみると、太平洋ということについては、まだちょっと別な意見が、またもう１つ言いたいことがあるんですが、アジアだけに、とりあえず太平洋を括弧に入れまして、括弧に入れることが実は問題があって、いわゆるきょうのパネラーの方でも、ほとんど「アジアフォーラム、アジアフォーラム」と言って、ほぼすべての方が「太平洋」を無視して発言されている。そのことに対する問いかけも別にしたいんですが、とりあえずここに括弧を入れますと、アジアフォーラムを企画する。今さまざまなところでやっていますよね。そういう場合に、さらに「アジア・太平洋」とつけるのも１つのトレンドなわけですけれども、そのこと自体が「なぜ今アジアフォーラムでなければいけないか」と。アジアを考えようとしているのは、だれかが主体となったエッセンシャリズムで、アジアというエッセンシャリズムを求める人々がどこかにいるから、やっぱり今またアジアなわけですよね。

実際にアジアといっても一言でくくれないということは、諸先生の発表の中でも、東アジアの中でも多様であるし、もうちょっと大まとめにして、東アジア、東南ア

ジア、南アジアとしても、それでくくるのは非常に難しい。午前中、瀬地山さんだったかがおっしゃっていた中に、それを言い出すと、「アフリカはなぜ入れないんだ」ということが出てきて、広げていけばどこまでも広がっていく範囲の中で、なぜアジアかというのであれば、やはりだれかが、今アジアを重視することを、「しろ、しろ」と言っている人々がいる。実際我々は研究者であるからには、そこからまず疑う必要がある。「今アジアが大切だぞ」と叫んでいる勢力があって、我々はそのことを疑わないで、どういう研究をやろうという具体的な話だけに行っていいんだろうか。今「アジアだ、アジアだ」と叫んでいるのが、そのままべつに大東亜共栄圏と同じ発想とは言いませんけれども、何らかの形で、べつにそれは軍事的と関係なくても、今アジアを強調しているのは、やっぱり日本でも政治家、財界人、それから各国の、東南アジアでも、マハティールとかスハルトとか、そういう首脳だったりするわけですよね。本当のアジアの民衆レベルの人々に下りていくと、アジアだから何か共通性があるなんていう発想自体が生まれてこないはずなんです。ですから、「地域研究という狭い枠組みに閉じこもらないで、アジアの中で広く」という発想は賛成なんですが、なおかつ、今なぜアジアフォーラムなんていうことを言い出したのか。「アジアということを強調している人々は、どういう意図があってやっているんだ」というようなことを、もう1回問いかける必要があるんじゃないかという気がします。

それに、さっきちょっと括弧に入れた関係で、もう一言だけ加えますと、太平洋なんですが、多くの場合、例えば福岡でも「アジア・太平洋〇〇ショー」とか、今設けていますよね。名前はちょっと違ったかもしれませんけれども。加えて、英語でも「Asia and Pacific」というような命名でフォーラムとか、団体がつくられたりしていますが、そのときの発想は基本的に、今回もそうだと思うんですが、先ほど指摘のあった地図だって、アジア・太平洋フォーラムなのに、ほとんど太平洋は表紙にも入っていないわけです。しかも、多くの場合のアジア・太平洋というのは「環太平洋」ということですよね。太平洋を囲む先進国―先進国だけではありませんけれども、アメリカ大陸、オーストラリア、それから東アジア。さらに太平洋を囲む、アメリカから見て対岸の西側で、アジアが、東アジアに限らず東南アジアも含めて、何かこれからの成長センターになりつつあるという予感があるために、「アジア」とまとめて何か強調し出したような部分もあるような気がするんですが、先ほどのアジアのまとまりということ自体を疑ってみるということに加えて、我々はもう1回、ついでについているような「太平洋」というのも、太平洋を囲んでいるというだけではなくて、伝統的な人類学だったら、「太平洋」という言葉を使ったら、当然オセアニア諸社会を考えに入れるのが当たり前なんですが、こういうところではほとんど無視するのが当たり前のような形になっていて、人口が少ないから、それから北朝鮮や台湾のように国際社会的な関心からは緊急性に薄いと考えられるために話題に上らないんですけれど、もう1回、ここではむしろ入れてみてもいいのではないか。

それは、私のちょっと卑近な例を出しますと、私も橋爪先生に非難されるような、わりとこせこせとした地域研究的なことをフィリピンでやっているんですが、その東南アジア研究という仲間内だけの狭い世界の中に、さらにフィリピン研究会だの、マレーシア研究会だの、「国ごとの研究会をつくってどうなるんだ」というような、外から見るといじましいような狭い研究会でも結構楽しくやっていまして(笑)、その、つい最近のフィリピン研究会の話では、もちろん「フィリピン研究をやっている人はフィリピンだけ見ていればいい」ということではないんですけれども、逆にフィリピンみたいな狭い世界を見ていると、ご存じのようにフィリピンというのは、フィリピン社会を論じるに当たっても、フィリピンの国境内だけでは何もわからない社会であって、むしろフィリピンと日本の関係というと、あちこちに出稼ぎに身を出しているという形で、視点がグローバルに広がっていますし、移民研究の中でも、これはフィリピンだけではないんですけれども、東南アジアとどこかの関係というときには、やっぱり日本だったり東アジアだったり、あるいはもっと歴史的にはインドとの関係ということなんですけれども、ほとんどアジアのときに、東側の太平洋との関係に目がいかない。

でも、実はフィリピンに限って言うと、東南アジアにおける日本がすごくでかいプレゼンスであるように、フィジーだのパラオだの、そういうところへ行くと、フィリピンのプレゼンスというものが、すごく地元社会の人にとっては大きな存在になっていて、太平洋のそれぞれの小さな島嶼国家を考える上で、東南アジアとかそういうところとの関係を見なければいけないし、逆にアジア研究でも、いくら小さいといっても太平洋との関係を目に入れることが非常に重要なんです。それは、「小さいとはいっても無視してはいけない」というレベルじゃなくて、小さい島嶼国家だからこそ、ある意味では、きょうの先ほどまでの議論にも出ていたような、ネイション・ステーツを問い直すような面白い問題というのは、実は太平洋諸地域の中にもたくさんあると思うわけです。

全然まとまりませんでしたけれど、私の言いたかったことは、アジアというのを大前提として当たり前と考えるんじゃなくて、アジアってなぜ言い出すのか。どうせだったら、「アジア・太平洋」というのを、くっついているので太平洋も視点に入れたらどうかという、ちょっと2点だけとりあえず。一とりあえずにしては長かったですが、申し上げさせていただきました。

渡辺： ほかの先生方、何かありませんでしょうか。

足羽： おっしゃる意味はよくわかるんですが、そのフィリピン研究で集まっている人たちが一想像の話ですけれど、皆さんでマレーシアに行ってくださって、2、3カ月そこで調査して、研究してくださる。そういうことは可能か。それで一体何ができるのか、何が語れるのかというようなところを、視点をずらすというような形で話しているんじゃないかと思うんです。フィリピンの中で、私も島国のスリランカ、それから突然に中国に行きました。中国を見ていて、毎晩毎晩悪夢のような毎日で1年間いたんですが(笑)、そのときに、「とんでもないことをしたものだ」と自分で思いつつも、でも非常に役に立っています。今何が語れるようになったかというと何も語れなくなってしまってはいるんですが、そういったような重点のずらしというのは地域研究者には必要じゃないかと思っているんです。単に素人が行って、先ほど言ったように、どこか東亜ですか。連れてきて、そして見て、素人にしかわからない一言とか、そういったものも大事なんですが、そうではなくて、研究者として、ある地域で非常にソフィスティケートされた議論を積み重ねてきて、見方というものを養った場合に、それがほかの地域、関係ない地域へ行ったら何が見えるのか見えないのかというところで、ある意味で私が期待しているのは、そこに地域に関係なく出てくるユニバーサルな問題と模索していらっしゃることのエッセンシャルなところが見えてくると思うんですよね。対象は移民であったり、いろいろな日本企業であったり、いろいろだと思うんですが。どんなユニバーサルなものが出てくるのか。そうではないものが出てくるとしたら一体それは何なのかというところを、人類学、社会学、いろいろ社会科学をやっぱり通っていく必要があって、それがオリエンタリズム、オキシデンタリズムの枠組みに取り組まれないうちにそういうことをしてタームを見つけながらつくっていくというところで、しかもローカルなintellectualsに触発されながら、影響しながらやっていくというところにいるんじゃないかと思っているんですよね。

そういう意味での、ここでの今の午後の話じゃないかなと。そういうところで、やはり人類学は考えなくてはいけないところがあると思うんです。それを持ち出して、ここに来ていらっしゃる社会学とか、いろいろな方の、先端と言っていいのかよくわかりませんが、そこら辺のものと重なり合うところは出てくるんじゃないかなと、私はここにいながら期待しているんですけれども。

渡辺： ほかにどなたか、何かご意見等ございますでしょうか。コメントをしておいたほうがよろしいでしょうか。この張本人のような県の企画部の方ですが。

原田： 済みません。私は県の企画部の人間なんですけれど、午前中ちょっと遅れたんですけれど、聞かせていただきまして、少し私は違う観点から伺っていまして、このセッションでは、どちらかというと、足羽先生がおっしゃったのとやや近いんですけれども、地域研究をしている中で、何か共通性のある、普遍性のあるものがアジアの中にあって、そのことがこの次のこのフォーラムのテーマにつながるものがないのかなと。そういう気持ちで実は朝から聞いております。ですから、先生方のいわゆる中に、何かこの次のフォーラムのテーマにつながるものが、しかもそれが、いわゆるアカデミズムのみならず、もう少し「シャバっぽい」といいますか(笑)、一般の方にも通用するような、そんな何かテーマが見つからないかなというのが、実は私の聞いているところなんですけれども、そういう面で、少し学術的なものと離れてしまうと、不本意かもしれませんけれども、ちょっとの時間でも、そんな赤裸々な論を闘わせていただくと私にとっては非常にうれしいんですけれども。

渡辺： 皆さんもお聞きになったと思いますが、そういう何か「赤裸々な」ということも言われましたけれど、またちょっとこちらのパネリストの先生方のほうで、マイクをもう1回こちらへ取り返したいと思います。

休みをこんなところで入れても仕方がないので、もうこのまま行ってしまいます。大体3時半という予定になっておりますので、大体その辺に収斂するぐらいで、あと30分余りというところで1回目の会合全体をまとめていきたいわけです。まとまらなければまとまらなくてもいいのかもしれませんが、先ほどから、今回の午後の最初に宣言といいますか、言いましたように、来年度、2回目以降につながっていくテーマ探しというところをやりたい。それに対する具体的な方法というのも、かなりプラグマティックな観点から決めていきたいということがあります。それに、今原田次長のほうから話が出ましたように、もう少し一般的なというか、「シャバっぽい」という言葉を使われましたが、そういうテーマ探しのようなことも、ついでにと言うと悪いんですけれど、それもやれないかということなんですが、その辺のことでぜひ、ざっくばらんでいいんですが、パネラーの先生方から何かご意見ありましたら出していただきたいんですが、いかがでしょうか。

リー： さっき園田さんがおっしゃったと思うんですけれど、やっぱり中国語で「関係」というと、何かやっぱり英語の「relation」とか「network」では片づかないんじゃないかというんですけれど、私はそれなりに、意外とそういう関係も面白いんじゃないかと思うんですよね。例えば、日本はネットワーク社会で、コネを使って仕事を見つけるとか、一応そういうことになっていますけれど、アメリカでも実際、ネットワーク的に見ると、仕事をどう見つけるかというと、やっぱりコネを使って見つけるんですよね。ネットワークを使って。ほかには、例えば日本的経営の1つの特有として「根回し」というのがあるんですけれど、これはアメリカでも全く同じで、私は今社会学科の科長をやっていますけれど、根回しの連続ですよね、つまり。

だから、そういう意味で、普遍性あるというものは、意外と特殊性の中にあるわけですよね。ほかに「シャバっぽい」ものというと、アジアの中で普遍性があるものというのは、ラーメンとか漫画とか、本当にそういう俗的なものになっちゃうんじゃないですか。

渡辺： 先ほどの、べつに企画室長の命令だという―そういう意味ではないんですけれど、先ほどの「わかりやすいテーマの枠で」というときには、今回の第1回、問題があるという指摘もありましたが、「静岡アジア・太平

洋学術フォーラム」という言葉の下にテーマというのがありまして、みんなあまり気にしていないんですけれど、「東アジアの発展の新潮流」というのがついているわけですね。これは、１回ごとに、少し特定された何かテーマをつけていったほうがいいということでついたような記憶があるんですね。一応組織委員会のメンバーになっているので、そこで出てきたと思うんですけれど、どういういきさつであったかというと、アジアの領域が、先ほど話も出ましたけれど、インドから、それからインド洋の全体にかかわる部分とか、例えばパキスタンからこっちだけではなくて、どんどん向こうまで行っちゃうと、トルコだとかカザフスタンだとか、そういうところまでみんなアジアだというような格好になっていきますととりとめがないと。

インドというのは、このアジアフォーラムの中の組織委員会でも随分話題になったんですね。今インドというのは、それこそ産業経済界における相手国としてかなり大きいので、これは取り込むべきじゃないかという話はあったんですが、やはり同じ論理でインドと朝鮮半島とか中国を入れていくのはなかなか難しいので、「インドをやるときには、また別個にやるべきだろう」というような形で、今回はとにかく東アジアというようなテーマがついてきたような記憶があります。

今回の第１回の個別テーマとしては「東アジアの発展の新潮流」というのがついているわけですね。これに当たるような、第２回の何かテーマですね。この第１回と全く途切れてはいなくて、何となく自然につながっているような感じがして、しかも何かup to dateなもので、みんなにも聞いてわかるような。多分そういう深い、いろんな思いを込めておっしゃったんじゃないかと私は思っているんですけれど、実際これが終わりましたら、第２回を11月の終わりごろやろうと言っていますので一企画会議みたいになって申しわけないんですが一そうしますとすぐにテーマを考えていかなければいけないところに入るだろうと思います。そのことはちょっときょう、お昼からこの分科会の中で相談しているときに念頭から飛んでおりましたので、もう少し具体的な中身を、こちらはこの分科会として考えて、その辺から出てきたアイデアで次の個別テーマを考えればいいかな、などと思っていたところなんですが、何かそのことも含めまして、べつにそのことに強くとらわれる必要はないんですけれど、先ほどから出ていたような話も含めて、もう少し特定化する。あるいは方法も込みで、時間が大分詰まってきましたので、ぜひもう一歩踏み込んだご意見をいただきたいと思うんですが、どうでしょうか。どなたからでも構いませんが。

瀬地山：　ちょっと、最初に関係ないほうから言います。多分、何かずらすという話は足羽先生かどなたかが多分後で言ってくださるでしょうから、ちょっとその話とは別の話で、さっきちょっと言ったら、園田先生に「つまらない、それ」と言われてしまった話をちょっとだけしておきたいんですが、静岡県ということで、県の予算を使ってやるわけで、「そんなことはべつに考えなくていい」というふうに渡辺先生はおっしゃっていらっしゃいましたけれど、やっぱりアジアとの結びつきというものを県民でレベルで考えるというか、地域共同体というレベルで考えるんだとすると、そんなに外に行かなくても、現実に浜松の町だと、日系ブラジル人がたくさんいるとか、それから県東の伊東、熱海というところだとフィリピンからの人たちがたくさん来ているとか、そんなことをしなくても、在日韓国朝鮮人というのは、コミュニティーとして、常にどこの町でもある程度いるとか、そういうことがあるわけですね。

そういう人たちとの結びつきの中で、やっぱり微妙な差別意識がある。それは表には出ないけれども、例えばある種の同情というのがそこの中に入り込むだとか。ちょっと学生さんのやった調査で非常に面白いものを見たんですが、最近日本人の若い女性が香港で働くというのがはやっていますよね。アメリカやイギリス、もしくはオーストラリアというような英語圏で働く人たちが多かったのに対して、最近香港に行く人たちがわりと出てきたと。そういう人たちの１つのモチーフの中に、アメリカやイギリスだと、日本に帰れるかどうか、いつ帰れるかというのがよくわからなくて、それから日本人であることをある意味では捨てて向こうに適応しなければいけないというようなプレッシャーがすごくかかるのに対して、香港というのは日本人が日本人のままでいられる気楽な空間なのだというのがインタビューの中でよく出てきて、どうして日本人が日本人のままで気楽でいられるのかと考えたときに、日本と香港の持っている落差というのがその中に微妙に作用していて、つまり彼女たちの中で、どこかで「日本は香港よりも上の国なのだ」という意識があって、そのことが彼女たちの日本人としてのアイデンティティーみたいなものを非常に支えていたりするんですね。私もそういう意識というのは理解が可能だと思うんですね。

そういう微妙な、簡単に「差別」と呼ぶにはちょっと粗雑なような、非常に微妙な意識みたいなものというのは、やっぱりそういうふうに、人と人とが触れ合う中でたくさん出てくると思っていて、そういうものをローカル・コミュニティーの中からほじくり出していく作業というのは、もっともっとまだ私はやることはいっぱいあるのではないかなというふうに基本的には思っています。とりあえずそういう話です。これは今までの文脈とあまり関係ないので、さっと過ぎてくださって結構です。

渡辺：　園田さん、何かありますか。今の件にかかわりがあってもなくても。

園田：　私がつまらないと申し上げた理由は(笑)、そういう研究はもう既に相当あるんだと。しかも私の研究室の隣の人のところに来ている留学生というのは大体みんなそういうことをやってくるものですから、「やっぱりあるモチーフの１つの発展形態というものが出てくるんだな」というぐらいに思ったからであります。

先ほどの「シャバっぽい」というのが、何が「シャバっぽい」のかよくわからないんですが、実は幾つか私の、研究者というのは大体種を植えて、出てくるものはそのまま伸ばせばいいんですが、だめなものはそのままだめにしながら、いろんな方向の研究の方向を考えていくと思うんですが、私は本当に無勝手にといいますか、無責任に幾つか、確かに「アジア・太平洋」という地域に区切る必要もないんですが、区切ると面白いかなと思う幾つかの、例えば先ほどのお話の延長で申し上げますと、これは必ずしも日系企業なんていうことに限定する必要もないと思うんですが、例えば政府という機関でもいいですし、あるいは民間の企業でもいいですが、例えば上司と部下の関係がどのようにでき上がっているのかという話。あるいは従業員のモチベーションがどうなっているかという話ですね。それに関しては極めて多くの理論が出ていることは確かです。

ある研究者によると、日本と韓国に関しては、労働の動機づけに関しては、性別というのは極めてきちんと出てくるんだけれども中国の場合出てこないとか。そういう、ある理論の応用という形で出てくるようなものというのは幾つかあるんですが、もう少し、何と言いますか、べたっとした事実のほうから積み上げていくといいますか、こういうような、例えば先ほどのパトロン・クライアントというのは、単純にインフォーマル・セクターの中ではなくてフォーマル・セクターの中でどう機能しているかという話は、実は相当多くの人たちが断片的に知識として持っていて、例えばフィリピンの研究者の人たちが、たまたま知り合いのフォーマル・セクターで働いている人たちの情報を持っているんだけれども自分たちの研究には生かしてないとか、あるいは現地で結構長いビジネス経験をお持ちの方なんだけれども、これは自分の行動の背後仮説に持っているだけであって、必ずしも議論の対象にしていないですとか、そういう必ずしも意図を結んでいないんだけれども、ある土壌の上にそういうデータを乗っけたときに結構面白いものが見えてきやしないだろうかというのに、今申し上げたような、例えば上司と部下の関係がどのように構成されているだとか、そういうようなものをつくっていく必要があるんだろうと思うんですが、他方、これも先ほどちょっと申し上げたんですが、そういう問いというのは、変な言い方をするといくらでも出てくるんですが、実に答えにくい問いでもあるといいますか、そのためにだれを呼ぶべきか、どういうデータがそもそもあるのか。どういう形で補助線を引いていくと答えができるのかというのは、これはものすごく大変な話でございます。

先ほど申し上げた、「アジアからの視点」という本をまとめ上げたときにも、結局調査が終わってから本ができるまで３年間ぐらいかかったのでありますが、これはジョン・リーさんの言い方を借りると「怠慢だから」と言われそうな気がしなくもないんですが、しかしそれは、ある問題をほじくっていくときに、実はこれは極めて弱そうな種だけれども、少し時期を待つと、これに関連の文献も出てくるはずだし、自分のリサーチも必ず進むはずで、その問いは絶対生かしたほうがいいと思って、結果的に生きたりですとか、あるいは「これは絶対面白そうだ」と思ってやってみたら、何だかすごく陳腐な議論になって、やってみても全然なんてことないというようなこともあります。ですから、今申し上げたようなところというのは、特にどうしても僕は調査対象として企業をイメージするから、「シャバっぽい」というと「ビジネスマンぽい」というところのコンテキストで申し上げているのかもしれませんが、幾つかの仕掛けをすると、例えば先ほど申し上げたような、今同時並行しているような合弁企業の問題みたいなところも、問題の仕掛け方によっては、アジアの中の問題というのは、もう少しリアルに出てくるんじゃないかなという気がします。

渡辺：　いかがですか。

橋爪：　「シャバっぽいトピックを研究テーマに」というのは、私の考えていることなんですけれど、ちょっとそれと違った角度から、テーマについてはさっき幾つか言いましたので言うと、私は社会学をやっているんですけれど、社会学のレベルというのは、ここ１世紀ぐらいでだんだん下がってきているような気がするんですが(笑)。どういう意味かというと、マックス・ウェーバーという人がいて、彼のころが私ピークだと思っているんですけれども、ウェーバーという人は、ご存じのように、インド社会について１冊本を書き、中国社会についても１冊本を書き、世界中の社会を比較するという１つのスキームをこしらえたわけですね。これは大変なことですけれど、どうしてそういうことができたのかと考えてみると、当時は各社会についてのデータというのが少なくて、彼は２次データを主に研究していた。それは一応一生かければ読める程度の分量だったんですね。今はそういうことはとても不可能で、その100倍から1,000倍ぐらいのデータが出ています。そうすると、専門家として食べていこうと思うと、どうしても現地語をまず習って１次資料を習わなくてはいけないし、それから細かく、ゾーン・ディフェンスでエリア・スタディーをまずやらなくてはいけないということになるので、いわば望遠鏡で見ていたところを顕微鏡を見るような感じになるわけですね。そうすると全体が見えなくなるわけです。社会学というのは、本来全体図を描くということを商売にしていたはずなんですが、ヨーロッパ社会以外の社会については、「少なくとも全体像は見えなくてもいい」というふうな感じにどんどんなってきて、志が低くなっていると思うんですね(笑)。それはちょっと語弊のある言い方だけれども。ですから「比較が大切だ」と皆さんおっしゃり、それはそのとおりだと思います。それから、あるエリア・スタディーをやっている人をひっぺがしてきて別なエリアに張りつけてショック療法を試みると。これも大変面白い、大賛成なんですけれど、しかしその心は何かというと、やはりウェーバーが昔やったみたいな、大きな、アジアならアジア、非ヨーロッパ社会なら非ヨーロッパ社会をも見通すような何か枠組みというのがないかどう

かという、果敢にして無謀な試みというのじゃないかなと思うんですね。

そこで大事なのは何かというと、言葉というか、概念だと思うんです。エリア・スタディーの人たちはどういう概念を使うかというと、かつての機能主義のように、世界中で共通な、言ってみればヨーロッパ的な概念を使う。ウェーバーも広い意味ではそうですね。もう１つは、ローカル・タームを使う。先ほど「関係」というのが出てきました。それと「ネットワーク」というのがありました。ネットワークというのはヨーロッパ言語で、「関係」というのはローカル・タームですね。ローカル・タームは、とても詳しくて、現地の社会にフィットするようにできているわけですから、これを使えば細かい記述はできますね。それを翻訳したり置き換えたりすれば、ある意味での普遍化はできたりするんだけれど、その言葉の迷路の中でうろちょろしていて、よその社会に使える言葉というのを実はつくり出していないんですね。

アジアというのは地域の名前で、大体この「アジア」という言葉自体が、トルコからなのか、インドからなのか、東南アジアからなのかということで混乱しているわけですけれど、ここから始まって、すべての言葉が、やっぱりふわふわしていて、私たちが使えるようになっていない。こういう言葉の再構築をしないと、多分ウェーバーがやったようなスタンスでアジアというものに迫っていくことはできないのかなと。そうすると、いくらフォーラムを繰り返してやってもむだになってしまうということになってしまいそうなわけですが、私はそういうふうに決して思わないので、向きは逆ですけれど、どういう目で、どういう概念で、どういう切り取り方でこの問題を切るのかということを、いつも注意しながらやっていくというのが必要じゃないかなというふうに思うんですね。

渡辺： まさしく本当に、皆さん多分同意されるあれだと思いますが、何か最近懐かしいマックス・ウェーバーのいう言葉も出てきて。

ほかの先生方、いかがですか。もしあれでしたら、もう一歩、今一般的なスタンスみたいなことについて、少しずつ話が、それでも詰まってきていると思うんですが、もう少し具体的に、今度第２回に向けてどうしようというような形で、視点ずらしを本当にやるとしたらどういうふうにやるのかとか、どこーという言い方もよくないんですけれど、例えば非常に限定された地域を考えるのか、あるいは、例えば今回「東アジア」というふうについているわけですけれど、またその東アジアにもう少し限定していくのか、なくなりそうな緊要性である国を選ぶのかとか、いろいろそういうことを含めて、もうちょっと具体化をぐっとできないでしょうか。話題全体をというか。

園田： 全くの思いつきですが、これは我々がスロバキアの連中と一緒にやるときにやる方法で、これを大きく、うまく組織できたら面白いかなという気がするんですが、先ほどの多分足羽さんの話というのをもう少し大きくして、例えばこんなことです。

それぞれのアジアの社会の１つの中で、例えば農村研究をやっている人たちを、何の情報もなく３週間、例えば静岡のどこかのお茶の畑でフィールドワークをやっていただいて、出てきたデータを、とにかくきちんと議論していただく。多分全然違うイメージが出てくるだろうと。当然それは、視点といいますか、そもそも注目する点が違うだろうと。同じ注目する点があったとしても、それは例えば「どういう機能を持っているか」という解釈の部分で相当ずれが出てくるように思うんです。それを、いわば生データの形で持ち寄りながら、そこにフロアからの意見なんかももらいながら議論ができたら、これは本当に思いつきの１つの実験的なケースなんですが、当然ある本を読んで、それをどう解釈するかというのもあるでしょうが、何かを見ながら、それをみんながどういうふうに、それを概念として構築していくかなんていうのは、１つフィルターが、そこを通して見えてくるという点では面白いかもしれません。

渡辺： 私は、例えば我々のというか、日本人の研究者で、例えば北朝鮮のことを全然知らない人が北朝鮮のことをやってみるとか、そういうことについて全然気分的に抵抗感もないし、どんどん言っちゃっていいという気がするんですけれど、今の設定は、例えばアジアの研究者を連れてきて、中川根あたりの茶畑に入れて、あそこら辺のお茶をつくっている農家のやり方とか経営の仕方、あるいはもうちょっと茶畑を含めた工場でもいいんでしょうけれど、そこを見てもらって、その視点から研究してもらったものを、３週間にしろ、レポートしてもらって、彼らがアジアの研究者の視点から茶畑を見たものを我々は資料といいますか、研究対象として見るわけですか。

園田： 落としどころはどこでもいいと思うんですよ。「やっぱり違うんだな」というレベルでもいいでしょうし、そこからもっとディスカッションを深めていきながら、例えばそれは、個々の視点だとか、あるいは解釈がどういう形でマージしていくかという、その合わされ方を見るというのでもいいでしょうし、それは多分いろんな工夫の仕方があろうと思います。さっき言いましたように、これは１つのケースですから、べつに僕自身がこれにこだわっているわけではありません。

渡辺： 私自身、発想そのものとして面白いんじゃないかと思うのと、「そういうのをやっていいのかな」みたいな、ちょっとよくわからない。なぜかというと、例えば変なあれですけれど、例えばサッカー選手を連れてきて野球の試合をやらせると。そのときに、みんながある程度見るに耐えるぐらい野球が上手な場合は、それはそれでまじめに楽しめるわけですね。ところがそうじゃなくて、野球をやらせたときにものすごくへたな場合はお笑い番組になっちゃうんですよね(笑)。そうすると、お笑い番組をやらせたやつは何か悪いやつみたいな感じになりますよね。そうすると、どっちへ転ぶか、やってみなければわからないわけですけれど、結果によって、提案

そのものが不謹慎なものになる場合も含めて、何か私はこういう提案というのはどうなんだろうかと。—どうなんでしょうかね。

瀬地山： やっぱり人選はもうちょっと慎重にやらないとというのはもちろんそうだと思います。例えば北朝鮮研究の話に戻しますと、やっぱり多分ソ連の専門家と中国の専門家と、多分韓国をやっている人と、というので集まって何かやるというふうにやれば、少しは面白いものが出てくるとかね。

渡辺： 例えば北朝鮮というようなテーマであればそうなんですよ。ところが、我々が連れていかれても同じだと思うんですけれども、それはそれぞれ労使関係とか何か、幾つか枠組みを持っているでしょうけれど、それにしても静岡の茶畑を持っていかれたら、アジアの研究者が来たって、我々だって、１週間で何を書いてくるかって、なかなか全く静岡の茶畑から入ったにもかかわらず、中身ははるかに遠い一般論になったり、そういうことになりかねないかもしれない。そのことを評価することはできますけれども、アジアの人たちがそれをやったときに、それを評価するというのは、何か茶畑の具象性があまりにもきつ過ぎて、なかなか難しいかなという気がします。静岡としての面白さでは捨てがたいと思うのでちょっとこだわっているんですけれどね。何かその辺をうまく考える方法があるのかなというのが、ちょっとあります。

あと、先ほどの北朝鮮をソ連の専門家がというようなときには、やっぱりネイション・ステート丸ごとという大きさですよね。それと、先ほど園田さんから出てきたような話の場合、例えば労使関係というような、経営の形態だとかいうような、もっと非常に具体的というのかな。ある社会システムの中で発生してくる、部分現象ではないんですが、より小さなといいますか、特定された現象というのを取り上げて、例えばある文化的な現象の中から、縮み志向があるだとか、包む志向があるだとかという発想を出してくるように、労使関係から敷衍して何かを出すとか。

それはもちろんキータームだけとして考えるということはあると思うんですが、やっぱり大きさというんですかね。サイズにおいてちょっと違うと思うんですよね、北朝鮮をソ連研究者がやるのと。その辺はどうなんでしょうかね。どの辺にポイントというか、サイズのポイントもあって、どの辺に置いていったらいいのか。何か、アジアというのは大きいにもかかわらず、そこに何か非常に、サイズが小さいと言うべきではなくて、ミクロと言うべきなんでしょうかね。

瀬地山： それはでも、テーマをどういうスケールで設定をするかということに恐らくかかわっていて、北朝鮮の場合は、逆に、それこそかつてのウェーバーの時代と同じぐらいデータが少ないので結構大ざっぱなことが言えるわけですが、それを東南アジアでやろうとしたら、例えば「東南アジアの家族と組織」とかというふうに、わりとテーマを絞ってしまって、家族を入れても組織を入れても、それは何でもいいんですが、それで東アジアなり南アジアの人でそういうことをやっているような人を連れてきて、そこから先、今度は現地調査をどの程度やるかという分岐点があって、それまでやってという話になると、やっぱり相当な時間と組織というふうになるし、そうじゃなくて、何か文献調査でやるとすると、ある種の視点の相対化みたいなものができるという話であれば、それは１年とかぐらいのタームでもできなくはないというような、そんな感じじゃないかなと思うんですけれどね。

渡辺： 今ちょっと話の中で出てきたわけですけれど、例えばアジア研究をある切り口でもって、継続的に何年かにわたって、比較的同じテーマで流していくというのか、積み重ねができるようなものを考えていくときの、アプローチの可能性とか、いろんなものがあると思うんですが、今たまたま出たような、例えばアジアの家族形態とか、家族形態ではなくて、企業とかそういう話が、それぞれの専門分野ですから、園田先生から出たし、それから瀬地山さんのほうから家族というような言葉が出てきたんですが、たまたま私は、割合固定した考え方なのかもしれませんけれど、午前中の報告のときに、社会構造的なファクターだというような言い方を、片方は階層とか職業構造みたいなことに着目されていて、もちろん無関係ではないわけですけれど、それも家族とかというのは、両方に相互規定的なところがあるとしてもですよ、それでも瀬地山さんのほうは、ジェンダーとか家族にかかわるような部分とか、そういうところをやっていらっしゃるとすると、何かそういう、コミュニティーなんていうものもあるかもしれませんけれど、我々に比較的なじみがあって、話を聞いたときに「それは何ですか」というのではなくて、例えば職業というのだって階層だって、みんなびっくりはしないですよね。同じように家族もびっくりはしない。そのぐらいのポピュラーな部分のあるような概念をキー概念にして、例えば割合継続的にアジアをやっていく。どこをどうするかという概念はもっと先にして。そういう考え方というのはどうでしょうかね。陳腐ですか。どこにでもよくあるやり方でしかないと言ってしまえばそれまでなんですけれどね。

瀬地山： どこにもないようなやり方をいきなりやれと言われても大体できないですから。

足羽： 例えば、そういったやり方を陳腐でないようにするためには、比較の度合いを深めると。それで、かなり社会階層のカテゴリーから何から、データをまずしっかり取って、ソフィスケーションですね。その度合いをしっかりする。「シンガポールではこうでした」「スリランカはこうでした」「よかったね」とか、「ここが違って、これはインドと中国の違いでしょうと」いう感じで終わるのではなくて、その比較の度合いで、そこが今具体的に、いろいろ努力をしてやらなくてはいけない局面に来ていると思うんですね。ただ、その一番難しいところは、カテゴリーの洗い直しから始めなくてはいけないということで、それが今非常に難しくなっている。

それと、アジアを私は区切る必要はないと思っているんです。どこまでとか。放っておいてもいいんじゃないかなと自分自身では思っています。できるだけ広げるような感じで。広げればあいまいになってしまうかというと、そうじゃなくて、議論のために幾つか選ぶのは構わないとは思うんですけれども、できるだけ広げて、あいまいなままで終わると。むしろ、アジアをこれでアウトにして提出してきてしまうことに対しての警鐘というんですか。それが必要なような気がしているんですよね。先ほど「ユニバーサルなもの」と言いましたけれども、それは決してアジア的なものとしてのユニバーサルなものという意味ではなくて、そういうふうに設定してしまう以前に、アジアと置く前に、オキシデンタリズムとオリエンタリズムの狭間に入らないというのは、そういった意味も含めまして、例えばアジアというか、香港で行われているのと同じようなことがニューヨークのチャイナタウンで行われていたとすると、そこでもアジア研究になっていくわけですよね。それをまた深めていけばアメリカ研究になっていくわけなんですよね。そういった枠組みの、重層性と緩やかなものというのを置きながら、逆にAsian valuesというものを使って、だれが何を発言して、どういったものをアジアを使って、先ほどの玉置さんじゃないですが、語ろうとしているかというところに常に警戒しながら進めていくというのは、重要な、戦略じゃないですけれど、方法だと思います。

橋爪：　「シャバっ気がある問題」ということで、少し考えるとすると、アジアの人々がどういうふうにアジアを自己認識しているか。相互を認識しているか。特に歴史の問題に関してどう認識しているかというのは、大変厳しい問題になっていて、普通なかなか冷静に議論できる問題じゃないんですね。そういうものを冷静に議論できる場所が必要なんですけれど、このフォーラムがそういうふうになれば、それは１つの方法かなというふうにも思います。

例えば、各国において、初等・中等教育で歴史を教えているわけなんですけれど、そういうものの内容について事前に情報を交換した上で、教育とか、社会、経済とか何でもいいんですけれど、そういうしかるべき見識を持った方々が集まって、「その認識というのはバイアスに基づいてないだろうか」とか、「逆な側面もあるんじゃないだろうか」というふうなことを議論する。これは学術的かどうかはちょっと問題ですけれど、学術的にしようと思えばこのテーマでもできないことはないと思うんですけれども、そういう、アジアをめぐるアジアの人々の認識ギャップというのは、アカデミックな世界ではあまり話題にならないけれども、今とても大事なことの１つではないかなというふうにも思います。

渡辺：　それも面白いですよね。今の橋爪さんの提案は、そういう形のフォーラムも考えられるということが１つですよね。

橋爪：　いろいろ言えば、要するにその中でどれかになるわけですよね。言わないと何もならない。

渡辺：　その前の、足羽さんのほうから出た、概念をどのぐらい特定するのかとか、洗練していくのかというような議論だったと思うんですけれど、例えばそんなことで考えると、今園田さんのところでは中間層の大がかりなやつをやっているわけですよね。何かそういうものと階層だと、かなり重なってくるという部分がありますかね。ほかにいっぱい走っているアジア絡みのプロジェクトというのが、文部省の大型のやつだとか、あるいはそれ以外のもっといろんなファンデーションのものとかあるわけですけれど、そこら辺もう少し見回した上では、どうでしょうかね。

園田：　例えば、１つ中間層の話もあるでしょうが、さっき申し上げた、重点領域の現代中国の構造変動なんていうのを見ましても、実は集まっているメンバーというのは、やっぱり中国のプロパーの人なんですよ。それを越えて、何か問題の設定をして、いわば地域を越えての問題の提案というのは、多分それはそうですね。むしろディシプリン・オリエンテッドな感じの人のほうが、まだ相対的には強いだろうと。ただこれも、実は視点ずらしなんていう話は、今月末にでき上がる、ある出版社から出るテキストで、僕だとか、あるいは瀬地山君なんかも一緒に書いた記憶があるんですが、そのときに、編者をなさっている方と僕で大体人を見渡したんですが、「いない」と。結論的に言うと、やっぱりいない。僕はべつに瀬地山君が嫌いではないんですが、どこへ行っても彼氏と会ってしまうとか(笑)、何とも絶望的なぐらい人員不足ということがあると思います。

ですからそこを、何と言いますか、フォーラムですから、ある成果の形で発表するのではなくて、ある場所に人々を引きずり込むような、つまり若い人が言い放ってもいいような形でやっていくのか。実際先ほどの中間層の場合は、まさにそういう風にやっているんですが、ただそうすると、成果が出るまでの仕掛けがものすごく時間がかかってしまうというのがあるんですね。先ほど申し上げたように、個々の地域がそれぞれに、ある意味でローカライズしていますから、本当にどういう形で、お互いのある領域をどんなふうに取り込んでいったら、ある比較がそもそも、お互いが共通した土俵で意味があると言えるかというのが、実はまだそれぞれのアジアの研究というのは、少なくとも私の知っている範囲内では、まだすくんでいると。そこまで勇猛果敢に、下手をすると「土足で入り込んできた」というような感覚を持たれてもいいというような相互了解が成り立っているかというと、僕はまだそういう意味で言うと大変難しいだろうと思います。

ですから、もう一度繰り返しますが、ある成果を発表するという成果の場なのか、ある学習を積み重ねていくような場として位置づけるかによって、もし後者であれば、僕はもう相当冒険的なことをやっていいと思うんですね。もし前者で考えていくのであるとすれば、先ほど午前の頭のときに、第３番目のポイントということで橋爪先生からご指摘のあった、いわばアウトプットの集約ということ。しかもある程度のレベルの、ということを考えてみた場合の仕掛けというのは、現状で考えると結構難しいかなという気がしますね。

渡辺：　そういう、割合一般的な方法というよりは、少し具体的にこの分科会を締めなければいけないということもあります。言い放って終わるというやり方もあるんですけれど、それぞれの立場から、本当にここで来年の企画会議をやっているわけではないので、決めてしまう必要はないんですが、今までいろんな形で、皆さんそれぞれいろんな意見やアイデアを発言していただきましたけれど、最後にもう１回ぐるっと回しますので、今まで言ったことの繰り返しでもいいですから、「来年以降はこれでいきましょう」とか「こういう方向にしましょう」みたいなことを、これは実際にそうならないかもしれないんですが、またこの後具体的に調整するとしましても、「いろんな話をしてきたが、面白くないと言われたが、やっぱり自分は」でもいいんですが、何かそういうことでも、あるいはそんなことは言いたくないということであれば、今回のお忙しい中おいでいただきました、この第１回のフォーラム全体にかかわる締めのご意見ということでもいいんですが、それこそ１分でも一言でも構いませんので、発言していただいて、とりあえずもう時間が来ましたので、今回のこの分科会を締めたいと思うんですね。

ですから、そんなことで一言ずつお願いいたします。橋爪先生のほうからよろしくお願いします。

橋爪：　今回は、いろいろ準備の都合もあって、実質的に準備の期間はなかったに等しいように聞いていますのであれなんですが、今後有意義に会を続けていこうと思ったら、やはり準備がかなり大変なんですね。ところが、準備それ自身が、研究のプロセスになってしまうようなことなんですね。先ほどから伺っていますと。ここで思うのは、実際に各回のフォーラムに従うかどうかは別にして、準備のときにアイデアを出すような人を別に頼んで、アイデアを出してもらいながらランニングして、「これでいこう」みたいに決まったところで改めて人選をしたりなんかして立ち上げるとスムーズに行くんじゃないかなと思います。ここでいくらいい考えを出して、仮に何かに決まったとしても、それを実現するのにちょっと技術が必要だというふうなことを感じましたので、もし可能ならそんなふうに進められたらいかがでしょう。

渡辺：　それは、例えば前もって作戦会議というのではなくて、例えば今度、今年ということになりますけれど、第２回を11月末だったら11月末にやるというときに、これに先立って、ペーパーセッションみたいな形でやろうとしている、ほかの学術会議ですね。もう終わったかもしれませんが、伊藤先生とか猪口先生とかのところで始まる前に出ていた意見なんですが、できれば今回のようなフォーラムを実際にやる以前に、何かの形でワークショップみたいなものを持って、そこで少し議論を、例えば１年あるとすれば、１年間の間に２度ぐらいぼんぼんとやっておいて、だから半年前までに２度ぐらいやっておいて、それで半年間ぐらいの期間を置いて論文を持ち寄って、それでセッションをやりたいというのは、伊藤元重先生がおっしゃっていたことなんですけれども、猪口さんもそんなような考えをお持ちで、学術会議というのが３本、これと走っておりますけれども、私もやっぱりそういうやり方はある程度必要じゃないかなと。いきなりここで出会って、電話連絡して、時間のスケジュールだけ聞いて「何かやりましょう」というので集まっても、ちょっと学術会議としては、同じスタンドポイントから何かをやるということはなかなか難しいのかなというふうに思っておりますので、今の橋爪先生のご意見も含めて、今後ぜひ検討したいと思います。

足羽先生、ちょっとコメントが長くなって申しわけないですけれど。

足羽：　これは続くんですね。多分、そのときの人によって、今たまたま考え方とか見方がかなり一致というか、近いところで議論しているような、一言言えば、大体「ああ、そうか」とわかるような人たちが集まっていますが。

渡辺：　いえ、たまたまではないんです。熟考して選んだメンバーです(笑)。もう１つ言いますと、最初に挙げたメンバーにお願いして、断られてということはありません。全部お願いして、私はみんな断られるかなとか思ったんですが、何かの理由で皆さんお引き受けいただいたので、もう第１次で考えたメンバーに去年から来ていただいておりまして、そういう意味では、ある程度同じようなところの土俵で、これは別の立場から見た方から言えば偏っているというふうになるのかもしれませんけれども、私は割合議論が、全くちぐはぐにならないで進んでいるということを、大変前回より喜んでおります。感謝しております。済みません、コメントして。

足羽：　それで、もし、次々と違う方が来られるとした場合、かなり考えが違う部分の方々も多いもので、そのあたりはどういうふうになるのかなという１つ不安があります。不安というか、期待というか、両方ですが。

もう１つは、これは全然脈絡から離れますが、前から一度皆さんに伺いたかったことなんですけれども、アジアから来た日本の留学生がいるんですよね。日本でマスターを取ったりPh.D.を取ったりして、その国へ帰って、閣僚、官僚なんかになっていったり、企業をしていたり、いろいろな人たちがいるんですが、そういう人たちをちょっと、大学で職を得ている人もいますけれど、活性化できないかなという感じはしています。英語の問題が出ましたけれども、べつに話すときに日本語でできるから楽ということではなくて、英語の文化で見方をつくられてきて、そして国へ戻ってきて新しいそこの国の見方をつくっていっているintellectualsではない形で産出されたintellectualsというものがもしいるとすれば、そういうところの方にも、私自身は今ちょっとアプローチしようかなと思っております。そういう方を呼べば、会議の時点でも、ある程度話しやすいのかもしれませんし、言葉の面を１つとっても。ただ、英語文化圏でない

形でその国を見て、そして日本との比較の目を持っている。それは１つターゲットとして面白いかもしれません。加えて、そういう人たちは大概日本からのサポートがないんですね。日本の大学を出ちゃったら、もう向こうへ行ったままで、欧米でPh.D.を取ってきた人に比べて二流、三流の扱いしかされなくて、日本の企業を誘致してこれるというだけが唯一の取り柄のような感じで扱われているので、そういったところのこちら側のサポートとしても、かなりいい方法かなと思っております。

渡辺：　そうですね。それはちょっと企画といいますか、組織委員会のほうの会議のところでは、そういった若手の研究者、アジアの研究者をどういう形かで組み込みたいという、懸賞論文だとか、若手によるシンポジウムを、大学を場所にして別に立ててやろうかとか、いろんなことを言っていたんですが、なかなか具体的に立ち上がらない中で、１つ今回提案したのは、きのう通しの部会でやりました「インターネット利用による研究情報交流」というやつで、このオンラインフォーラムの中に、まずアジアの若い研究者に入り込んでもらって、そこでディスカッションみたいなものが、インターネット上でそういうことがやれて、その中から例えば人を呼んでくるとか、そういうことも考えられるんじゃないかというのは、一方でちょっとやっているところです。

それでは園田先生、ちょっと。

園田：　ほとんど私、枯れていますが。つまりもう言い尽していますが、考えてみると、先ほどの渡辺先生のおっしゃった学術会議、猪口先生、伊藤先生、渡辺先生の３つの会議を見ると、先ほどのジョン・リーさんの言う、冷戦構造化における３つのディシプリンというのはやっぱり生きているんだなと感じました。もしそれが生きているんだ、死んではいないんだということになりますと、我々の集まりは、社会学あるいは社会学に近いディシプリンによる集まりというように明確にしちゃってもいいのではないかなという気がします。

そうしたとき、先ほど申し上げた上司－部下の関係。あるいは労働への動機づけの問題。こういうような幾つかの、実際には比較研究までなされてないけれども、そして個々の領域の中においては、ある程度のローカリゼーションがなされていながら、しかし比較の土俵に立っていない。しかし比較をすることによって、どこか何かある種の補助線が出るかもしれないような、それは価値というレベルでの統一性なのか、あるいは従来これが普遍的な命題だと言われたものに対するある種のアンチテーゼなのか、いろんな形で議論される可能性がありますが、そういう補助的な概念をできるだけうまくオーガナイズした形でのディスカッションをやっていけたらいいんではないかというふうに思っています。

渡辺：　ありがとうございました。それでは瀬地山先生。

瀬地山：　私も、具体的な話はさっきしたので、基本的にはよくて、１点だけ。もし本当に北朝鮮とか台湾をやるとしたら、私は一応肩書き上国家公務員ですから、北朝鮮をやるに際して、事務方とものすごくけんかをしたんですね。しょっちゅうぶつかります。そういういろんな覚悟が必要であるということだけ、いずれも国交のない国であると、かなり大変だと思いますから。

渡辺：　その件で言いますと、県立大には、北朝鮮の情報をいろいろ知っていると言われている伊豆見さんという先生がおられるんですが、その伊豆見さんがメインになりまして、静岡総研が入りまして、実際北朝鮮から人を大分呼んで、県大でシンポジウムを１回やったんですね。これはNHKか何かで流したんですかね、衛星放送で。これをやるときの会場を、「大学の大講堂を使うのはまずい」とか、テーマが北朝鮮だと結構いろいろありまして、なかなか大変だということはよく知っております。

それではジョン・リーさん。最後ですから何とでもおしゃってください。

リー：　具体的には、日本の学者の方が多いので、やっぱり日本に関連したテーマを追ったほうがいいんじゃないかと思うんですよね。ただ北朝鮮が重要なテーマであることはだれも否定しませんけれど、やはりベースとするデータがないし、専門家といっても大した専門家もいないという状態ですから、それよりかえって、もっとできるようで、かつ社会科学にも貢献できるようなテーマがあるんじゃないかと思うんですよね。例えば「アジアの中の日本」とか「日本の外の日本」という感じで、「アジア中に潜入している日本文化のゆくえ」とか、そういうことを追ってみても面白いんじゃないかと思うんですけれど。

渡辺：　ありがとうございました。

いろいろこうやってやっていますと、いくらでもだらだらと続くんですけれど、実はきのうの夜も、ここの大半のメンバー、夜中の12時50分まで、打ち合せというわけではないんですが、プレセッションでしゃべっておりまして、きょうは朝10時から始めまして、お昼休みもずっと、ほとんど食べ物を入れる暇もないぐらいにしゃべりながらお昼休みも過ごして、きょうまでやってまいりました。

一応これで、とりとめもない形かもしれませんが、本日の分科会を終わりたいと思っております。ここで午前中にそれぞれの先生方から出していただきました基調報告と、それから午後にみんなで議論してきました今後の方向につきましては、あと、それこそメールを使ったり何かしながら、もうちょっと詰めた形で、比較的早い時期に方向性を見つけて今度の第２回につなげていきたいと思います。自由がきくかどうかというのはともかくといたしまして、一応分科会をやらせてもらっている私としましては、このメンバーを基本にして、今後もう少し続けていければというふうに思っておりますので、諸先生方もお忙しいとは思いますが、今後ともよろしくお願いいたします。先生方、本当にお忙しい中ありがとうございました。リーさん、遠いところから大変ありがとうございました。

それからフロアの皆様方、私の不手際もありますけれども、プログラムに「自由に論ずる」と書いてあるから許してもらえるかなと思いまして、普通のパネルディスカッションとかシンポジウムの形式を取りませんでした。これは、ラウンドテーブルのあり方もいろいろあると思うんですが、今年実験的に、きのうのインターネットの部会から含めまして、このように自分たちで端末の前に座って、自分でそれぞれ端末をのぞきながらぶつぶつしゃべるみたいな形式にさせてもらいました。これは１つの実験的な試みでありまして、壇上でみんなが並んでしゃべる方式ばかりがいいのかどうかということもあるので、やりました。また賛否両論あると思いますが、いろいろご意見をお寄せいただきまして、今後の参考にさせてもらって、また面白いものができていけばいいと思っております。

アジア研究の本論よりも周辺的なことが多くなりましたけれども、本日は長い間大変ありがとうございました。先生方ありがとうございました。

おまけ

がんばろう！日本!!

国家衰亡の危機、政党と主権者はどうあるべきか

10・10集会

と　き：10月10日(土・祝)　午後1時(開会)

ところ：ニッショーホール

(地下鉄銀座線「虎ノ門」3番出口　徒歩3分)

参加費：2000円

●

第一部「国家衰亡の危機、政党と主権者はどうあるべきか」

- 基調　戸田政康　民主統一同盟、フォーラム地球政治21(準)代表
- 講演　中西輝政　京都大学教授
- 講演　小沢一郎　自由党党首(要請中)

第二部「抜本的改革の政党とその支持基盤を、どこからどのようにつくっていくのか」パネルディスカッション

パネラー／東　祥三(衆院議員・自由党副幹事長)
枝野幸男(衆院議員・民主党政策調査筆頭副会長)
田中　甲(衆院議員・民主党国民運動本部長代理)
中村敦夫(参院議員)
錦織　淳(前衆院議員・首相補佐)　五十音順・敬称略

コメンテイター／橋爪大三郎　東京工業大学教授

1998年9月1日

第233号

民主統一同盟
機関紙